

6

「蝦夷の鉄」 「Iron Road・和鉄の道」より



岩手県北上市の市民憲章には

「あの高嶺 鬼住む誇り その潮音 久遠の賛歌

この大地 燃えたついのち ここは北上」

と誇らしく歌う

この「鬼」とは古代「日高見(北上)川」沿いのこの地に住んだ自分たちの祖先
蝦夷の族長 日高見の鬼「アテルイ」とその一族 蝦夷 を指す

今から約200年前 奈良時代の末期から平安時代初期にかけて坂上田村麻呂を征夷大將軍とした蝦夷征伐があった。
坂上田村麻呂ができるまで、朝廷が苦しめられ続けた蝦夷の族長が「アテルイ」
この蝦夷征伐のもうひとつの側面は今まで輸入に頼っていた「金やくろがね」がこの蝦夷の支配地であったことによる鉱物資源の支配
朝廷の蝦夷征伐の大軍を苦しめ続けた蝦夷の族長がアテルイ。
蝦夷の心情に共感しつつも戦わねばならなかった征夷大將軍坂上田村麻呂
長年にわたる戦争の中で、アテルイは蝦夷の和平を願い、盟友・モレと約500人の兵とともに田村麻呂に降伏。
坂上田村麻呂の「蝦夷支配に活用できる人材」と助命嘆願もむなしく、アテルイは河内国で斬首。



2004. 1. 18.

By Mutsuo Nakanishi

蝦夷の鉄

「和鉄の道・Iron Road」より

参考 佐藤清志氏著「ヒタカミの鬼 一和我の里一」より 抜粋
<http://www.michinoku.ne.jp/~satok/at14.html>

「出羽は、いかがでしたか」
 アテルイもモレに尋ねた。出羽は現在の横手市の近辺である。そこにある雄勝城で、エミシの民と朝廷の間でいざこざがあったのである。
 「雄勝城に帰順する者と背くものが半々というところでしょうか。いまは、出羽の租や課は、比較的軽い状況ですが、いずれ、出挙（すいこ。年利率50%で朝廷の稲を貸す制度）や、義倉（ぎそう。凶作にそなえた穀物の無尽制度）で、がんじがらめになることを心配していたようです。征服された民のさだめですが」
 「背いた人たちは、その後どのように暮らしているのですか」
 「帰順した人が多くおりました。しかしすぐに西方（九州地方のこと）に送られるようですね。ええ、ご推察のように、林業と製鉄の技術指導が兵士としてです。その他は山に逃げたようですね。子波族の地にも、多数流れたようです。和我でも受け入れました。たたら作業に就いております」
 長老側近でなければ知らない情報がモレの口から紹介された。

「和我の鉄は、定評がありますからね」十三湊（とさみなと）の者が口をはさんだ。
 和我の里では、「高殿たたら」による生産様式が、和我川上流（現土畑山付近）に導入されており、天候に関係なく一定のペースで鉄素材を生産できたのである。モレは逆に、十三湊の者に尋ねた。
 「十三湊の鉄の相場はいかがですか」
 モレの関心は和我の主力交易品である鉄素材の状況である。和我の若者達も緊張した顔になる。
 十三湊の者はしかし、暗い顔で答えた。
 「ふむ。正直な話、下がり加減になった。越後の連中の話だが、このところ朝廷改修や遠都の熱が冷め、新羅侵略を計画していた仲麻呂もいなくなった。しかし近江や出雲、越後はあいかわらず鉄を量産し続けているようなので、陸奥の鉄がだぶついたようだ」
 エミシの玄關十三湊には、越後等から鉄素材や木材また塩、魚介類の仲買人の来訪者が多い。この貿易港には、交易品の流通のみならず、村を追われた者や渡来人がたどり着き、その後、当時の禁制品であった製鉄に従事することも多かった。
 アテルイは、このような者の組織化や開発、流通を行うことが本業であった。

- | | | |
|---|-------|-----|
| 1. 岩手県の人達が作った長編アニメ映画「アテルイ」に今の時代を重ねて | 和鉄の道Ⅲ | 15. |
| 2. 7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫 「行方製鉄遺跡」を訪ねる | 和鉄の道Ⅰ | 4. |
| 3. 岩手県北上川流域の和鉄 一関博物館へ
蝦夷の主要武器「蕨手刀」・日本刀のルーツ「舞草刀」を訪ねて | 和鉄の道Ⅱ | 8. |
| 4. 心残りだった東北 和鉄のふるさと walk 北上江釣子・砂鉄川・蔵王
「あの高嶺 鬼住む誇り・・・ 北上市市民憲章」と歌う | 和鉄の道Ⅲ | 8. |
| 5. 『田舎なれども南部の国は 西も東も金の山』
岩手県・南部「蝦夷の鉄」 北上山 系大槌・釜石 | 和鉄の道Ⅲ | 2. |
| 6. 古代 出羽国 秋田 和鉄の道を訪ねて
北上川流域の陸奥から奥羽山脈越 出羽・秋田そして津軽十三湊へ
奥羽山脈越えの和鉄の道は蝦夷の生命線 | 和鉄の道Ⅲ | 5. |
| 7. 奥州 蝦夷の心臓部を貫く和鉄の道
-北上（和賀）仙人峠越-
東北 鉄の山 気にかかっていた「和鉄のさと」を歩いて- | 和鉄の道Ⅲ | 6. |
| 8. 「弘前ねぶた」と岩木山北山麓「鬼伝説の里」
「鬼沢・鬼神社」・「十腰内・巖鬼神社」 | 和鉄の道Ⅰ | 8. |
| 9. 岩木山北山麓の製鉄遺跡群と鬼伝説 | 和鉄の道Ⅰ | 6. |

1.

岩手県民製作の長編アニメ映画「アテルイ」に今の時代を重ねて



2004. 1. 10. aterui.htm by Mutsu Nakanishi



岩手県北上市の市民憲章には

「あの高嶺 鬼住む誇り その瀬音 久遠の賛歌
この大地 燃えたついのち ここは北上」
と誇らしく歌う

この「鬼」とは古代「日高見(北上)川」沿いのこの地に住んだ自分たちの祖先 蝦夷の族長 日高見の鬼「アテルイ」とその一族 蝦夷 を指す

そんな思いの岩手県の人達が一昨年製作した市民長編アニメ映画「アテルイ」がある
盛岡在住の高橋克彦氏のすごい迫力の大著小説「火怨」をベースに作られた映画である
一度 見たいと思いつながら実現できなかったのですが、
DVD・ビデオ販売されているのを知ってやっと見る事が出来ました

2004. 1. 6. 朝日新聞朝刊 「opinion news project」欄に論説副主幹 桐村英一郎氏「いらちの小憩 森を守ろう」と題して次のような一文が掲載された。

森、山、そして自然に宿る神々が昨今、注目をあつめるのはなぜだろう。

(中略)

経済も科学も文化も右肩上がり伸びるといふ史観は「稲作と金属器、国家統合の原理というハード、ソフト両面のハイテク」が日本に持ち込まれた弥生時代から始まったのかも知れない。

目標感覚が狂い、不安にかられた日本人の中で自然を畏怖し、その恩恵に生きた遠い過去の「血」がさわぎはじめたのではないかと

弥生時代から続いた自然支配の文明が行き詰まっている。 世界は縄文文化に回帰せねばならない」というのは哲学者の梅原猛さんである。

(中略)

ここで私たちが当惑し、立ち止まることは決して無駄なことではない。

血の中に受け継いだ自然と共生した時代に思いをいたし、小さくとも今できる行動をする。

そんな年にしたいものだ。

2004. 1. 6. 朝日新聞朝刊「opinion news project」欄

論説副主幹 桐村英一郎氏「いらちの小憩 森を守ろう」より

ぼくの受け止めは 縄文を体現できる東北の楽しさと現地へ出かけて色々得た実感の数々。
さらに使い古された言葉ではあるが、「歴史を振り返るもよし」 自然への回帰 風来坊はやめられぬと・・・。
また、やっとみつけた 岩手県の市民製作 長編アニメ映画 「アテルイ」の姿をこの文にかさねていました。

東北に通って「和鉄」について歩いているうちに 『日高見(北上)の鬼』と呼ばれる蝦夷の族長「アテルイ」に東北の人達が親しみを込め、熱っぽく語るその人物像ならびに「アテルイ」への強い連帯感にビックリ。アテルイの生涯と蝦夷の戦いを熱っぽく描いた盛岡在住の高橋克彦の小説「火怨」。

吉川栄治文学賞を受賞した大著で、時代を感じさせない凄い迫力がある。

これが 東北人の思いを込めたアニメ映画「アテルイ」の原案。

東北人で語られてきた蝦夷観 田村麻呂と蝦夷との交流ほか当時の東北の事情をよく現しているとともに現代を生きる知恵も・・・・・・・・。

2003. 1. 10. MutsuNakanishi



岩手県北上市の市民憲章には

「あの高嶺 鬼住む誇り その瀬音 久遠の賛歌
この大地 燃えたついのち ここは北上」
と誇らしく歌う

この「鬼」とは古代「日高見(北上)川」沿いのこの地に住んだ自分たちの祖先 蝦夷の族長 日高見の鬼「アテルイ」とその一族 蝦夷 を指す

今から約 1200 年前 奈良時代の末期から平安時代初期にかけて坂上田村麻呂を征夷大將軍とした蝦夷征伐があった。

坂上田村麻呂がでるまで、朝廷が苦しめられ続けた蝦夷の族長が「アテルイ」

この蝦夷征伐のもうひとつの側面は今まで輸入に頼っていた「金やくろがね」がこの蝦夷の支配地ですることによる鉱物資源の支配

朝廷の蝦夷征伐の大軍を苦しめぬいた蝦夷の族長がアテルイ。

蝦夷の心情に共感しつつも戦わねばならなかった征夷大將軍坂上田村麻呂

長年にわたる戦争の中で、アテルイは蝦夷の和平を願い、盟友・モレと約500人の兵とともに田村麻呂に降伏。

坂上田村麻呂の「蝦夷支配に活用できる人材」と助命嘆願もむなしく、アテルイは河内国で斬首。



● 古代東北の動き

- ▽710 (和銅3) 年 平城京遷都
- ▽724 (神亀1) 年 朝廷が、東北制圧の拠点・多賀城 (宮城県多賀城市) 造営
- ▽767 (神護景雲1) 年 伊治城 (宮城県築館町) 造営
- ▽774 (宝亀5) 年 蝦夷の抵抗始まる
- ▽786 (延暦5) 年 朝廷軍が胆沢攻撃へ
- ▽789 (延暦8) 年 続日本紀に阿弋流為 (アテルイ) の名が登場。
朝廷軍5万2800人が第1回胆沢攻撃。
アテルイ率いる蝦夷が北上川東岸の巢伏村で対戦。
ゲリラ戦で朝廷軍に歴史的勝利
- ▽793 (延暦12) 年 坂上田村麻呂が約10万人の兵を率いて第2回胆沢攻撃。
アテルイ軍、大打撃を受ける
- ▽801 (延暦20) 年 朝廷軍が第3回胆沢攻撃。アテルイ軍、力尽く。朝廷軍が胆沢制圧
- ▽802 (延暦21) 年 田村麻呂が蝦夷支配の拠点・胆沢城 (水沢市) を造営。
アテルイ、モレと蝦夷約500人が田村麻呂に降伏。
アテルイとモレ、河内国 (大阪府枚方市付近) で斬首される
- ▽803 (延暦22) 年 志波城 (盛岡市) 造営
- ▽811 (弘仁2) 年 徳丹城 (矢巾町) 造営

坂上田村麻呂を信じ 更なる騒乱による犠牲と荒廃をさげ、自ら投降し平和共存を願
「50年 100年先を見て その中での平和な暮らしの為に」
「子供には 戦いを教えるな 戦わせるな」
と恒久の平和共存を貫く

「アテルイは親、兄弟を愛し、美しい自然を愛すために生きた。

21世紀の人間がどう生きるかという大切なメッセージがある」と東北の人達はメッセージを送る。

話を聞くにつれ、今日本人が忘れかけている人物に出会ったような気がしていました。
ビックリするほど1200年前の構図と同じ鉱物資源を狙った大国支配の構図と弱者支配の眼
現在のイラク戦争の大国主義の構図がそっくりそのまま当てはまるような気がしてなりません。
賛否は別にして 現在の「高速道路公団民営化」の構図も
中央・官僚と地方同じではないか……
……等々。

【参考】

巨大勢力となった寺から逃れる為、奈良平城京から平安京へ遷都されたこの時代。東寺・西寺しか許されなかった平安京に蝦夷の制圧に成功した坂上田村麻呂は国家加護の道場として清水寺の建立を許されている。

東北にある蝦夷の勢力の強さがこのことから推察される。

また、坂上田村麻呂の頭の中に蝦夷の族長「アテルイ」への思いがあったかも知れぬ。その背後の東山 坂上田村麻呂が葬られた地には「將軍塚」の名前が今も残されている。東北の地にも、大將軍 將軍通りなどの地名が今も残る。



なお、京都 坂上田村麻呂の建立した清水寺には当代になって関西アテルイ顕彰会など市民団体の手によって アテルイ・モレの碑が田村麻呂・アテルイ友情のしるしとして建立された。

【 「和鉄の道」 関 連 】

- 和鉄の道Ⅱ 8. 岩手県北上川流域の和鉄 一関博物館へ
蝦夷の主要武器「蕨手刀」・日本刀のルーツ「舞草刀」を訪ねて
<http://www.ne.jp/asahi/mutsuo/nakanishi/jstlbb08.htm>
- 和鉄の道Ⅲ 5. 古代 出羽国 秋田 和鉄の道を訪ねて
北上川流域の陸奥から奥羽山脈越 出羽・秋田そして津軽十三湊へ
奥羽山脈越えの和鉄の道は蝦夷の生命線
<http://www.asahi-net.or.jp/~zp4m-nkns/kdiaktaa00.htm>
- 和鉄の道Ⅲ 6. 奥州 蝦夷の心臓部を貫く和鉄の道
-北上（和賀）仙人峠越-
<http://www.asahi-net.or.jp/~zp4m-nkns/wgasen00.htm>
- 和鉄の道Ⅲ 8. 心残りだった東北 和鉄のふるさと walk
北上江釣子・砂鉄川・蔵王
「あの高嶺 鬼住む誇り・・・・・・ 北上市市民憲章 」と歌う
東北 鉄の山 気にかかっていた「和鉄のさと」を歩いてー
<http://www.asahi-net.or.jp/~zp4m-nkns/0307ttohoku.htm>

2003. 3. 15.

2004. 1. 10. aterui.htm by Mutsu Nakanishi

7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫

「行方製鉄」遺跡を訪ねる

福島県原町市 金沢製鉄遺跡

1999.11.13. hrmci.htm by Mutsuo Nakanishi



4. 1. 7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫「行方製鉄」遺跡を訪ねる
4. 2. ヒタカミ「日高見(北上)」の鬼 蝦夷(エミシ)の雄アテルイ
4. 3. 8世紀 蝦夷と戦った畿内王権の前線基地「多賀城遺跡」

2. 1. 7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫 「行方製鉄」遺跡を訪ねる

福島県原町市 金沢製鉄遺跡



朝日新聞 「日本の原像」の記事 福島県原町市金沢製鉄遺跡とその上に建つ発電所

今日は 久しぶりに家内と二人 昼の常磐線 快晴の空に映える太平洋の海を眺めました。 朝日新聞大阪版夕刊に「日本の現像 鉄器登場」が連載され、福島県原町市に「日本誕生」にかかわった大規模な製鉄遺跡の有った事を知り、日立にいる姉を訪ねがてら家内と二人で出掛けた。

東京から常磐線の特急で約4時間。日立から太平洋を眺めながら、勿来・常磐を過ぎて福島県にはいり、山間から東に太平洋 西に阿武隈山地を望む盆地にはいる。

「相馬馬追い祭り」で有名な相馬盆地の中心に原町市がある。

この原町市の北の外れ相馬市に隣接した金沢地区の太平洋に面した丘陵から、東日本最大の製鉄遺跡群が出土した。

7世紀後半の奈良時代 日本統一へ向けて、坂上田村麻呂ほか東北征伐が行われたが、その兵器製造所

として武器製造の拠点として 日本統一に重要な役割を果たした「陸奥の国 真吹郷 行方の製鉄」である。

遺跡は東北電力の原町発電所の中にあり、連絡もとらずふらっと出掛けた為残念ながら中に入れず。発電所の建っている外から遺跡群のある丘の周辺を歩き眺めてきました。

発電所の建設により、海岸周辺は良く整備された美しい静かな公園となっていた。太平洋とはるか遠くをゆく船をまた日の出を見るには絶好のポイント。太平洋に面してこの遺跡の上に建つ、東北電力原町発電所とそれに隣接して太平洋の荒波に洗われる海岸北泉海浜公園 砂鉄の海岸で遊んで帰りました。

後日東北電力 原町発電所の石田純一氏より、丁寧なお手紙とともにこの製鉄遺跡発掘の記録資料やビデオまた 鈴木啓氏「宇多・行方の製鉄をめぐって」等多くの貴重な資料を送っていただいた。

1. 金沢製鉄遺跡 東北電力 原町発電所 資料より
2. 金沢製鉄遺跡の特徴
3. 砂鉄の舞う浜 北泉浜 福島県原町市北泉海浜公園
4. 北泉浜で 浜砂鉄が描く模様
5. 「Iron Road 鉄の道」

朝日新聞 「日本の原像」より

「鉄の生産開始を機に七世紀後半、いまの仙台市以南が、さきほかに開拓された。東北地方南部は激変を遂げた。今月三日、福島県会津若松市で開かれた全国組織の鉄器文化研究会の研究会で、寺島文隆・同県文化センター室長は、こう講演した。

寺島さんは日本最大の製鉄遺跡である同県・金沢地区製鉄遺跡の発掘調査と研究を長年続けていた。講演は、この遺跡の発掘成果などをまろす、東北各地の遺跡・遺物も総合して分析した内容だった。優れた業績を基盤にした鋭い見解は、研究者らの注目を集めた。

「大規模コンピナート」

金沢地区製鉄遺跡群は太平洋岸の同県原町市と鹿島町の一部に広がっている。東北電力原町火力発電所の建設に伴い、一九八九年から巨額地帯を約二二万五千平方メートルを発掘調査。これまでに製鉄炉百二十三基をはじめ、つくった鉄素材を加熱、加工して鉄器をつくる鍛冶炉二十基、燃料の木炭を焼く窯百四十九基の跡が見つかった。

生産に伴って出るカス、鉄屑約七百トンも残っていた。また送風用の新式装置「駒みふいご」も、ここで明らかになったし、従来の技術による硬質の土器・須恵器を焼いた窯跡も判明。寺島さんは「この地で先人たちが取り組んだ技術革新の跡をたどることができた」という。

日本の原像

第9部 鉄器登場 ⑥

東北に王権の兵器製造所



さらに職人らが住んだらしい堅穴式住居百三十三棟と、製品の保管、役人の詰め所などの管理施設とみられる掘っ立て柱建物二十九棟の遺構、土器類、木炭なども分かった。原料は阿武隈山地から川で運ばれ、太平洋の荒波に洗われるうちに「自然選別」され、ふ厚い地層がでるほど積もった砂鉄だった。燃料となる豊富な森林、輸送の船が停泊できる河口の自然の港などにも恵まれ、七世紀後半から一千年余りにわたって操業し続けた「大規模製鉄コンピナート」と結論づけられた。

ここで製鉄が始まった七世紀後半は、律令制が軌道に乗り始めたころに当たる。天皇を中心に、法と行政組織を整え、全国統一をめざす政治体制化。王権の拠点はすでにこのころ、古川市・多賀城、仙台市・郡山両遺跡の拠所のような遺構など知られるように、現在の宮城県内に及んでいくことが、近年の調査で明らかになっている。

一方、阿倍臣羅天による当時の風俗を政治・文化の民衆史記(六五八年)以後、八世紀の「蝦夷三十八年戦争」などを経て七世紀中ごろまでに、いまの青森県を除く東北の大半が王権の支配下に

組み入れられた。そして間もなく、金沢地区製鉄遺跡群は廃絶している。

この間、蝦夷が高まった八世紀後半には鉄が通常の三倍ほど増産された形跡がある。戦いに必要な刀剣、やじりなど鉄の武器類を、主にここでつくった。事態が沈静化に向かうと武器はあまり必要でなくなった。たまたま」と寺島さんはみている。

「日本書紀」が十一代とする異行天皇の皇子、日本武尊の「蝦夷東征」伝承に、興味深い物語が紹介されている。船首に大鏡を取りつけた船で、蝦夷勢力との境界まで北上した時、尊の姿と軍勢の威勢を恐れ、大鏡が服従したというのだ。その境界は竹木門という地名で、原町市付近にあった多賀郡という地名である。この「五雄伝説」には、同製鉄遺跡群あたりが一時、「対決の最前線」だった可能性が窺われている。

時代とともに隆盛し、廃れた「王権の兵器コンピナート」。関連分を含め、調査はことし三月に一応終了した。さらに近く、発電所の施設に隣接する隣接地域での発掘調査が再開される予定。そこにも遺跡が眠っている見込みだといふ。発電所の敷地内には今春、約一億五千万円かけて製鉄炉など遺跡の一部をドーム方式で保存・展示する施設ができて公開されており、企業には珍しい決断と評判になっている。

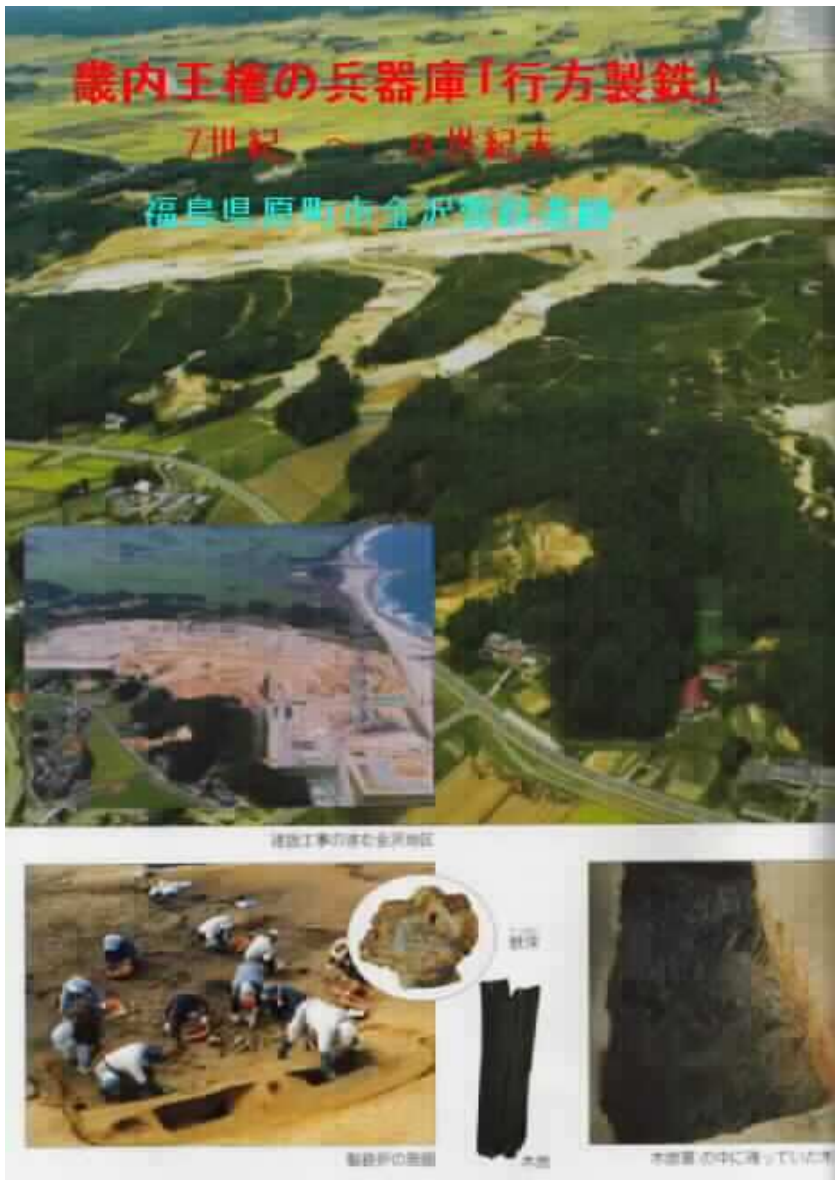
古代の王権を支えた鉄は、大半が豪族の主役を担う武器になった。鉄器は血なまぐさい側面をもっていたのだ。

(編集委員・天野 幸弘)

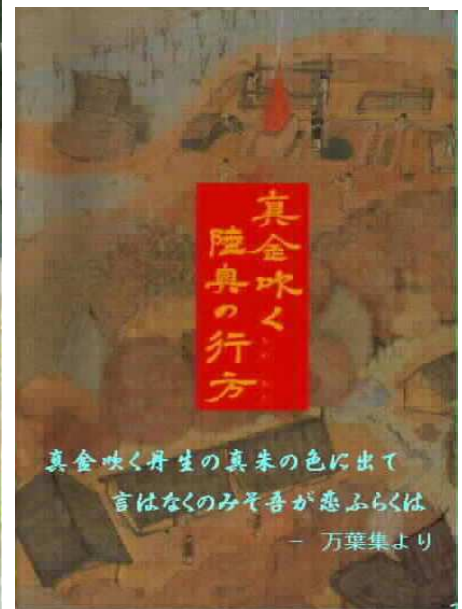


1. 金沢製鉄遺跡

東北電力 原町発電所 資料より



万葉集 14巻 3560首
「真金吹く丹生の真朱の色に出て
言はなくのみそ吾が恋ふらくは」



● 8世紀蝦夷征伐と行方製鉄遺跡

「たたら」遺跡の多くが山深い奥地の谷あいにあるのに対し、この金沢地区製鉄遺跡群は海岸に面した丘陵にある。すぐそばに背後の阿武隈山地から流れ出て、太平洋の荒波に洗われ、堆積した浜砂鉄の宝庫 泉・北泉の浜がある。

この明るい丘陵の谷間に7世紀から8世紀末にかけ、大規模な製鉄炉や鍛冶炉・炭焼き炉など数々の製鉄鍛冶が営まれた。

当時 奈良時代 畿内王権が着々と日本を統一をめざし、その勢力を東北にまで拡大、蝦夷征伐を盛んに行っていた。

この行方製鉄はその「王権の兵器庫」として重要な役割を果たした。

坂上田村麻呂の蝦夷征伐により 蝦夷勢力が討ち果たされ、胆沢城(現在の一関市)が築かれ、東北が平定されると兵器の需要の低下とともにこの行方製鉄も衰退してゆく。

「真金吹く 丹生の真朱の色に出て

言はなくのみそ吾が恋ふらくは」

この歌は原町市金沢の「真吹郷 行方製鉄」を歌ったものであると鈴木啓氏は述べている。万葉集に読まれるほどの有名な大規模な製鉄所であった事がしのばれる。

「宇多・行方の製鉄をめぐって」より

2. 金沢製鉄遺跡の特徴

石田氏からいただいた資料によるこの遺跡の全盛期 たたら炉は縦型炉から箱型炉に進化し、踏み鞆を有していることに特徴があり、その踏み鞆のあとが完全な形で出土している。

この踏み鞆の採用により、製鉄量は大幅に増大したことは想像に難くない。

この踏み鞆を持つ箱型炉が全国へ波及して行き、時代が下るに従って天秤鞆を持つ大規模なたたら炉へと進化して生産量を大幅に伸ばしていた。

このように「たたら製鉄」や「鍛冶」にとって「鞆」は極めて重要で、後年これらの繁栄を祈願する祭りを「鞆まつり」と呼び、今も続いている。

江戸時代 紀伊国屋文左衛門が嵐について 江戸へ運んだみかんは江戸の鍛冶師たちの「鞆祭り」の供え物として必須のみかんであったと言われている。

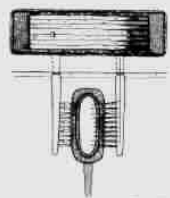
長方形箱形炉に踏ふいごを付設 金沢製鉄遺跡の特徴

8世紀後半になると、左の写真のように箱形炉に踏ふいごがつくようになります。

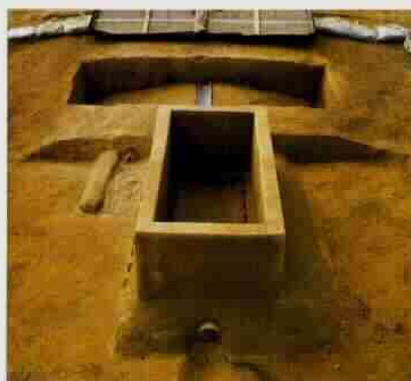
踏ふいご付設の結果、質のよい鉄を大量に生産することができるようになりました。

踏ふいごで圧縮した空気をどのようにして炉内に送り込んだのでしょうか？それを復元したのが下図です。圧縮された空気は、炉の左右につくられたトンネル状の送風孔を抜け、そこから炉に平行して粘土などでつくられた空洞を通り、そこから複数の羽口を経て炉内に送り込まれたようです。

大船迫A遺跡の15号製鉄炉からは、下の写真のようにたくさんの羽口が並んだ状態で出土しています。これは何らかの理由で操業を行う前にこの製鉄炉が放棄されたことを物語っています。



復元図



復元した踏ふいご付箱形炉



踏ふいご付箱形炉の跡

踏み鞆と箱型炉の復元

行方製鉄の最盛期(8世紀後半～9世紀前半)



発見された大船迫A遺跡27号製鉄炉です。踏ふいご付の箱形炉です。踏ふいごの遺存状態が非常に良かった製鉄炉です。

出土した踏み鞆と箱型炉 8世紀

3. 砂鉄の舞う浜 北泉浜 福島県原町市北泉海浜公園



北泉浜で きらきら光る砂鉄



砂鉄の浜で 白砂が風に幾筋も舞う

発電所の正門のすぐ横は松林におおわれ、綺麗に整備された北泉海浜公園。海岸にはきっと砂鉄があるはずと砂鉄を探しに行きましたが 本当に印象的な美しい白浜で黒い細かな砂鉄が白砂に混じって 実に綺麗な紋様を描いていました。

見渡す限り太平洋の中 荒波にもまれて沢山の若者が大きな波にサーフィンを楽しんでいる一方 誰もいない砂浜では、波にもまれた細かい砂鉄が 美しい砂鉄の風紋を作り、その上を細かい白砂が風によっていく筋も 流れて、家内と二人風の中に立って見とれていました。

4. 北泉浜で 浜砂鉄が描く模様





風に舞う砂鉄が描く風紋

5. 「Iron Road 鉄の道」

7世紀から8世紀東北にあった蝦夷国・出羽国・津軽国 畿内王権の蝦夷地征伐で次々と畿内王権に組入れられ、日本国が誕生した。

これらの国には 恐らく北のまほろば 三内丸山遺跡・亀岡文化などに代表される縄文人やオホーツクの民の血が濃く流れていたに違いない。

これらの国と弥生人の血を色濃く持つ畿内王権とが出会いそして日本国の完成へ。

戦いに使われた蝦夷の刀は日本刀の原型となった「蕨手刀」。それが原型となって刀は突く武器から切る武器へと変身し、戦いの主力武器へ。

この蝦夷と畿内大和政権との戦いの武器調達を担った鍛冶の主力が、この金沢の製鉄遺跡。

ここでも「Iron Road・鉄の道」が歴史の重要な転換点の役割を演じ、出会いを演出している。

この日本誕生に役割を演じ、縄文と弥生人融合を演出した浜の砂鉄を紙にさっと包んでポケットに入れ、この浜を後にした。

私にとっては 空白だった鹿島・房総から三陸海岸の間の部分 阿武隈山地・陸奥のたたら遺跡との最初の出会いだった。

原町は相馬馬追いで有名な町であるが、日本誕生に関わった製鉄の重要な町でも有る。

真金吹く 陸奥の行方 福島県原町市金沢 真吹郷

「真金吹く丹生の真朱の色に出て 言はなくのみそ吾が恋ふらくは」

1999. 11. 13. 福島県原町市 北泉海岸・金沢地区製鉄遺跡にて

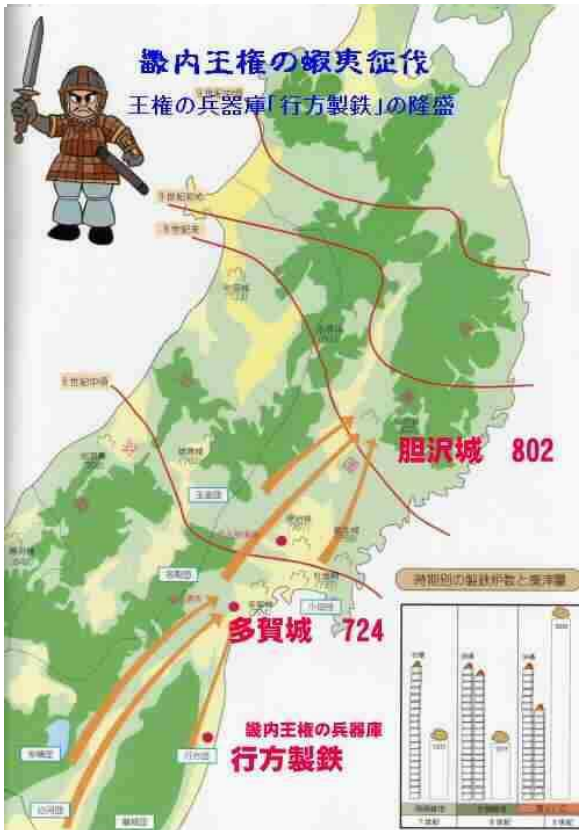
2.2. 日高見(北上)の鬼 「蝦夷(エミシ)の雄 アテルイ」

佐藤清忠氏著 「ヒタカミの鬼アテルイと田村麻呂」より抜粋

<http://yositsune.ichinoseki.ac.jp/SATOK/pr/ezo/oni.htm>

1999.11.27. 採取

htkmi.htm by Mutsuo Nakanishi



東北電力 原町発電所発行「真金吹く陸奥の行方」より

「それ以前にも、紀古佐美(きのこさみ)率いる約5万朝廷軍をわずか千数百の兵で打ち破り、遁走を余儀なくしたこともあった蝦夷の雄 アテルイ 774年から38年間続いた蝦夷征伐戦争で、前沢・衣川付近でひと頃は約10万の田村麻呂率いる朝廷軍の侵入を迎えた。

日本を二分した畿内政権と蝦夷との戦いの戦場が日高見(北上)一関から始まった。

8世紀末の10万の大軍が、胆沢平野へとなだれこんできたのだが、胆沢の巨星、アテルイはひるまず、戦い大軍を翻弄した

しかし801年、初老の域に達したアテルイは、朝廷軍が現水沢市に造った胆沢城(後の鎮守府)を目の当たりにし、田村麻呂に最後まで残った500の兵を連れて降伏し、都に連れてこられた。

朝廷はこの天才指揮官らを田村麻呂必死の懇願に関わらず斬首してしまった。

みちのく民衆のこころ、怨念の歴史は、この時から始まった。

さまざまな伝説が生まれ、今日までも、奥浄瑠璃や祭の形で語り継がれてきた。

佐藤清忠氏 「ヒタカミの鬼-アテルイと田村麻呂」より抜粋

畿内政権が行方(現在の福島県原町市)に大規模な製鉄所を持ち大量の武器の製造を行っていたが、対抗する蝦夷国も日本刀の原型になった蕨手刀(わらびてとう)の量産技術をもっていた。憶測では、渤海など大陸との交易や出羽や津軽との交流により、採鉱、燃料調達、製鉄の技術を持っていたものと推定される。

目立った戦争経験がない蝦夷国が朝廷の十分の一以下の兵力で抵抗でき、民の心を結集できたのだろう。



畿内政権と戦った蝦夷国アテルイの武器 蕨手刀の分布

2.3. 8世紀 紀元724 蝦夷と戦った

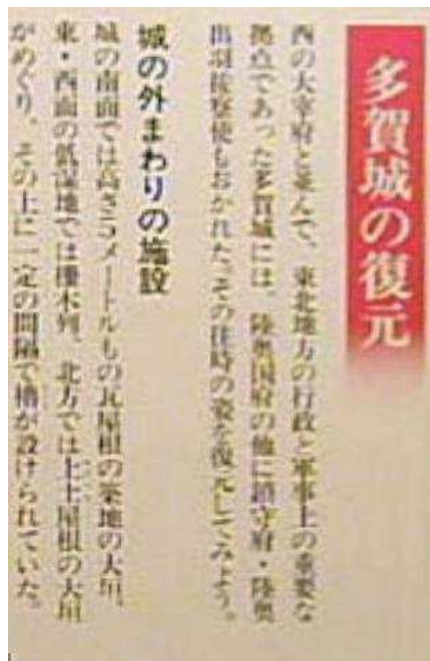
畿内王権の前線基地 「多賀城遺跡」

2000.1.20. tgjyo.htm by M.Nakanishi

多賀城は仙台平野の東北端に位置し、海拔4mの低地から50mを越す丘陵地まで起伏に富んだ地域を占めている。

周囲は約900m四方の不整形に土塀や柵木列がめぐり、その中央に約100m四方の政庁がある。その周辺には多くの役所や兵氏の住居などがある。

佐倉歴史民俗博物館にかざられたこの復元模型は780年の伊治公皆麻呂の乱で焼失後に復興された平安初期の姿を示している。



4. 7世紀 畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫 「行方製鉄」遺跡を訪ねる

【完】

岩手県 北上川流域 の 和 鉄

3.

蝦 夷 の 主要武器 「蕨手刀」

日本刀 の ルー ツ 「舞草刀」 を訪ねて一関博物館へ

2001. 10. 11, ktkmi01.htm by M. Nakanishi



一関市立博物館 一関市巖美溪

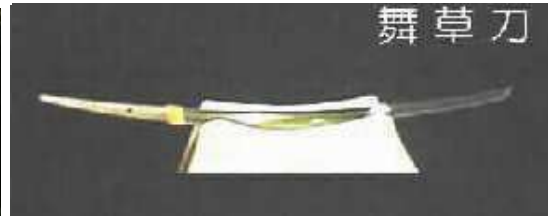


宮城・岩手の国境にそびえる栗駒山 2001. 9. 22.

古代 奥州で生まれた日本刀のルーツ



蕨 手 刀



舞 草 刀

3.1. 北上川流域の和鉄



岩手北上盆地から太平洋(右側) 栗駒山頂から 2001. 9. 22.

10 月半ば 一度訪問したいと考えていた北上・一関を訪問仙台をでて約 30 分 新幹線が広い宮城平野を抜け 右手に栗駒山・栗駒高原を背後にした広い田園地帯が広がる。栗駒山・焼石岳などの連なる奥羽山脈と北上山地にはさまれた広い田園地帯で、岩手県の母なる川「北上川」がその中央部を北から南へ流れ下る川沿いに南から北へ一関・平泉・水沢・江刺・北上・花巻・盛岡と点々と街が続く北上地方である。

ここは この山間は古代から鉄や金などの鉱物資源が豊富な土地で、古代 奥州・蝦夷 が活躍した根拠地。蝦夷の首領「アテルイ」が「蕨手刀」を武器に大和朝廷に最後まで抵抗した土地である。

水沢・江刺の北上川の東には奥州征伐の前線基地 胆沢城跡が残る。そして、中世 一関・平泉では金や鉄など豊富な鉱物資源を背景に藤原三代が栄華をほこった。

また、「鉄の国 岩手」を支える鉄の中心は「南部」久慈から釜石へかけての海岸地帯であるが、古代・中世にはむしろその中心は北上川沿いの盆地であると聞く。 蝦夷の兵器庫・鍛冶部がどこにあったの

か 自分は知らないが、蝦夷が使った「蕨手刀」。

それまで「突き」が主体の「直刀」であった刀に対し、「切る」ことを主に「反り」をつけた「蕨手刀」が、猛威をふるった。その後 中世この蝦夷刀鍛冶の伝統を受け継いだすごい刀「舞草刀」がこの土地（一関近郊 舞草）で生まれた。この刀が「反りと長身」を有する日本刀のルーツだという。

盛岡の岩手県立博物館には「奥州 和鉄」の多くの資料がありそう。また、一関博物館には「奥州鍛冶」や「蕨手刀」の展示があると聞き、是非一度ゆっくり訪ねたいところだった。

何度も東北新幹線では通るもののゆっくり歩いた事なし。一関・平泉に出掛けたのはもう 30 数年前。栗駒岳登山と引っ掛け、一関へ。また 10 月 11 日秋の溶接学会出席の帰りに盛岡岩手県立博物館そして現在の岩手一の工業都市北上にもよって帰りました。

一関博物館では蝦夷の首領アテルイが使った「蕨手刀」や古代奥州鍛冶の流れ 日本刀の原型「舞草刀」を知ることができました。また、奥州の和鉄製造に広く使われたと言う主要原料「餅鉄」。聞いた写真で見たことはありますが、まじかにみるのは初めてでした。ましてや 川などから得られ、そのまま製鉄原料として使われていたなど知らず。実際に物を見て、本などに書かれている事など理解出来ました。

北上川沿いに新幹線が走るたびに 一度は下車して調べて見たいとおもいつづけていた「和鉄の北上地方」「蝦夷と蕨手刀」と「餅鉄」。この二つの不思議な謎がやっと解けたような気がします。

今度は岩手のもう一つの和鉄の中心地 釜石から三陸海岸沿いに久慈まで歩きたい。10 数年前 後背地北上山地の圧倒的な木々の多さと海岸の険しさに圧倒されながら歩いた和鉄の道。当時は全くみむきもされなかった和鉄の道ですが、今はどうなっているのだろうか????。

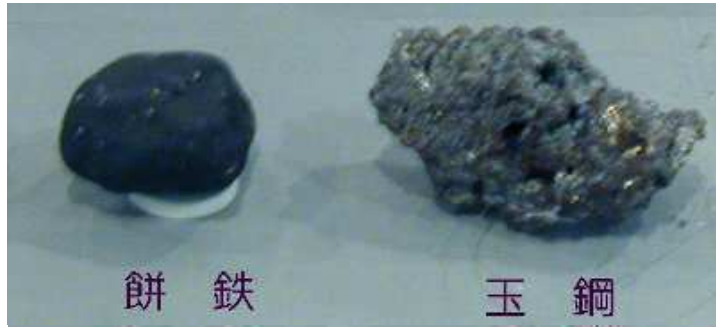
10 数年をへて 日本の近代製鉄業も変わりつつあり、また、日本各地のたたら遺跡が日本歴史の 1 ページとして掘り返されつつある今 どんな風になっているか 楽しみでもある。

2001. 10. 21. M. Nakanishi

岩手県 北上川流域 の 和 鉄
3.2. 一 関 市 立 博 物 館 で
ktkmi02. htm by M. Nakanishi



1. 餅 鉄
2. 蝦夷の首領 阿豆流 為の蕨手刀
3. 舞 草 刀
4. 参 考
 1. 古代畿内勢力の蝦夷征伐の兵器庫
福島県原町 金沢製鉄遺跡
 2. 平泉中尊寺・盛岡 岩手県立博物館



1. 餅鉄

古代東北地方で産出した粒状・塊状の磁鉄鉱で主砂鉄や鉄鉱石と共に蝦夷が使用した要鉄資源。
(平均2キロ。1個で50キロのものもあるという。)

餅鉄は破碎を必要としない粒状のものもあり、主に河の中などに堆積しているが、山道や耕地にもある。金属状の光沢があるので採取しやすい。特に岩手県釜石付近の餅鉄は純度が高く、鉄分含有量が平均70%。特にリンやイオウなどの不純物が少ないなど良質。

北上で後年出土した「蕨手刀」の製鉄原料としてこの「餅鉄」を原料として精練・鍛冶されたものが多数ふくまれているといわれている。

2. 蝦夷の首領 阿弭流為の蕨手刀



蕨手刀は5世紀末には既に製造がはじまっており、奈良時代後期を中心にして、奈良時代前期から平安時代初期にわたってつくられたもの。特に北上の胆沢と和賀が拠点とみられ、餅鉄や砂鉄を原料につくられた。この頃大和朝廷の奥州征伐に対して、激しく抵抗した蝦夷の主要武器として威力を発揮した。蝦夷の首領阿弭流為の蕨手刀は66cmぐらいあったという。

現在鹿児島や徳島まで180刀発見されているが、岩手が57刀と断然多い。奈良の正倉院にもこの「蕨手刀」がある。

一関市立一関博物館 展示より

「奥州でいつ鉄の加工鍛冶・精練がはじまったのか？」は定かでないが、700年文武天皇の製鉄禁止例「東辺北辺に鉄冶を置く事得じ」との令がでて、蝦夷の武器作りに大和朝廷が神経質になっていた事が記されている。

この事からかなり古くから鉄の加工・鍛冶精練が始まっていた事がうかがえる。おそらく大陸・朝

鮮半島からやって来た渡来人を通じ、鉄鍛冶の技術が伝えられていたのであろう。

この禁止令が出た頃 奥州には渡来人の刀匠(漢国鍛冶)がいたことが記録されている。そして この奥州の鉄鍛冶・刀作りの優秀性は奈良・平安時代都にも広く伝わり、奥州刀が都に広く持ち込まれている。一関郊外の「舞草」はその刀鍛冶の中心の一つとして、蝦夷が滅んだ跡 蕨手刀を改良して長身で反りのある刀「舞草刀」を作った。これが、日本刀のルーツとして奥州鍛冶とともに日本全国へ伝播していった。

3. 舞草刀



舞草刀 一関市

一関市を流れる北上川の東側にある舞草地区
ここには鉄落山はじめ、刀鍛冶伝承や地名、
信仰された石像などの平安時代に栄えた舞草
刀鍛冶の痕跡が残っている。
この地の鉄落山の南斜面から平安時代の土器
とともに鉄滓が出土しています。
刀身が長くて反りのある日本刀の原型がこの
舞草など奥州で作られ都で評判になった。
その後 藤原氏の衰退などで舞草など優秀な
奥州の刀鍛冶が各地に散らばり、この特徴あ
る刀作りが日本刀の原型として広がっていった。
蕨手刀を改良した舞草刀。舞草は日本刀の故郷

舞草刀の登場

日本刀は、刀身が長く、反りがあり、揃つくりで、日本独特の鍛冶がなされています。
 鎌平刀から発展してきた舞草刀は、最も早くこの条件をみたした刀のひとつでした。
 舞草刀が日本刀として完成された理由には、長い間に積み重ねられた優秀な技術、熊手や藤原氏などの大きな勢力や、中央政権との長年の戦いがあったことなどが考えられます。
 古い書物には、舞草刀などの奥州の刀剣が、都で評判となったと書きのこされていて、源氏や平氏の宝刀とされたとも伝えられています。



『源氏物語』(神代より現代まで)上の巻(42頁中8巻も見える舞草刀)の挿絵

舞草鍛冶の活動

奥州の刀鍛冶たちは、刀のきたえ方や使いやすさをさらに求めていきました。
 鎌平刀の柄を揃くくりぬいて毛抜形鎌平刀をつくり、やがて長くて揃くくりの柄刀・毛抜形太刀に発展させたのです。この毛抜形太刀は、都では貴族の正装に使われました。今では、この刀が日本刀成立の正装のものであるとされています。このような刀の姿に大きくかかわったのが奥州舞草に住んだと伝えられる舞草鍛冶と考えられます。



毛抜形太刀を身につけた姿。この太刀は御府太刀とも呼ばれ、密門前(宮城などの官衙)の首人の正装です。

鍛冶集団との交流

刀剣に関する古い記録には、全国のほかの刀工との深い交流が示されています。
 舞草刀とはほぼ同じ時期に、これらの地域でも日本刀がつくられ始めていて、作風も似ていたといわれています。
 また、歴史書によって平泉・藤原氏が滅ぼされると、舞草鍛冶のほとんどは、鎌倉など全国へ散っていき、各地の鍛冶へ影響を与えたと考えられています。
 一方、この地にのこった刀工は、室町時代まで刀づくりをつづけたことが知られています。



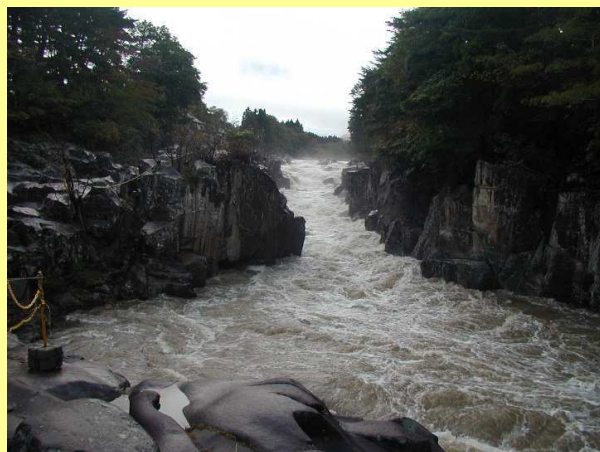
4. 参 考

1. 古代畿内勢力の蝦夷征伐の兵器庫 福島県 原町 金沢製鉄遺跡

【 黄金吹く 「行方製鉄遺跡」 】



2. 「一関・平泉」 点 景



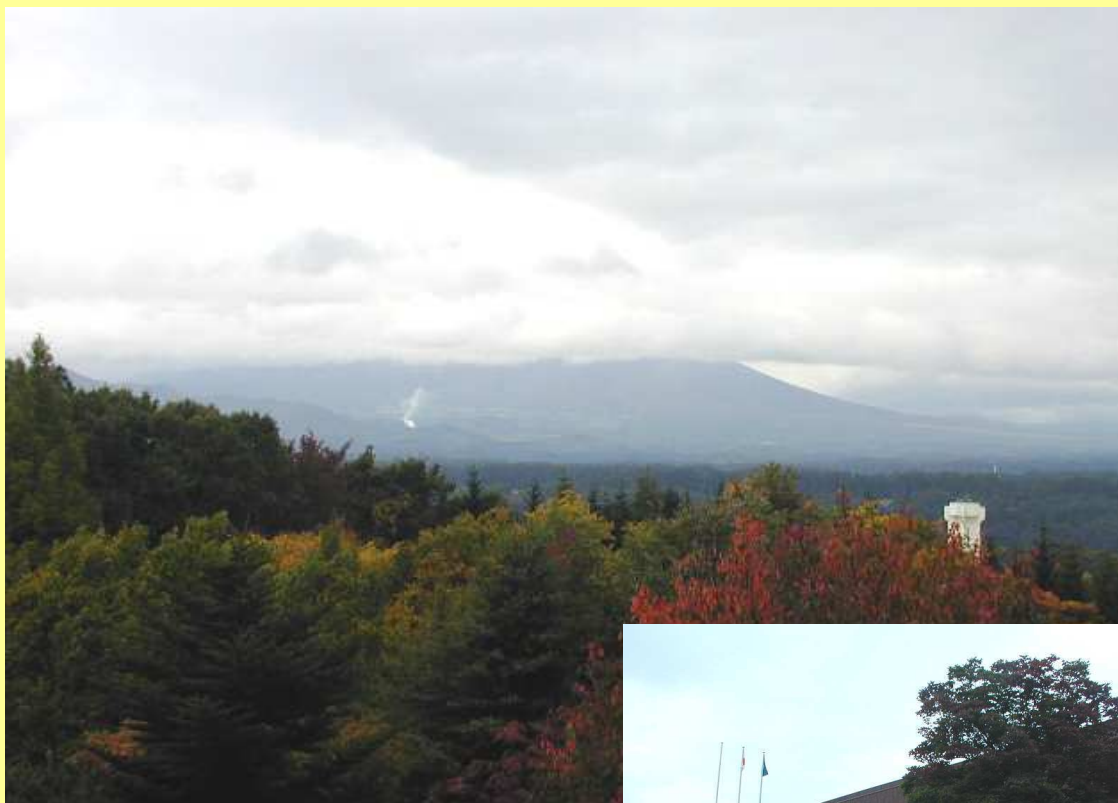
巖美溪 と 一関博物館 一関 巖美



平泉 中尊寺 金色堂

中尊寺から 前九年の役 古戦場 2001. 9. 22

3. 岩手 盛岡



岩手県立博物館 岩手山を望む



盛岡の夜景と旧岩手銀行本店 2001. 10. 11

4.

心残りだった東北「和鉄のふるさと」WALK

北上 江釣子・砂鉄川・蔵王

「あの高嶺 鬼住む誇り・・・ 北上市市民憲章」と歌う

東北 鉄の山 気にかかっていた「和鉄のさと」を歩いてー
0307touhoku.htm 2003. 7. 14-15 by M. Nakanishi沼原(ぬまっぱら)湿原
福島県 2003. 6. 28.北上市 江釣子古墳群・和賀川
岩手県 2003. 6. 14.蔵王連峰 熊野岳とお釜
山形県 2003. 6. 15砂鉄川・猯鼻溪
岩手県 2003. 6. 14.

千葉 柏での単身赴任の4年間 東北へ随分通いました。

北の端 青森・秋田を含め、4年 東北各地を随分訪ねました。僕は 東北好き人間。
神戸に帰るとちょっと遠くなるので、まだ 行けてないところ 気になっている所をチェック

1. 蝦夷 鉄のふるさと 和賀の里 和賀川と北上川の合流点 北上市江釣子
ここには 蝦夷の古墳群があり、その近くには今「鬼の館」が建っている。
2. 北上山地の南の端の山中を流れ、一関近傍で北上川に注ぐ「砂鉄川」
北上川との合流点近傍 東山町では谷が迫り 猯鼻溪という美しい溪谷をつくっている。
今はもう砂鉄が取れないが、透明な流れに砂鉄が沈積し、船頭が歌う民謡を背に川くだりの舟がゆく
3. 山形蔵王連峰と含鐵泉の蔵王温泉
東北の脊梁を南北に貫く奥羽山脈は鉄鉱脈の眠る鉄の山。
東北への新幹線から何時も眺める蔵王連峰。和鉄の話は聞かないが、山麓の蔵王温泉は含鉄泉。
4. 那須連峰の南端 山懐に眠る沼原(ぬまっぱら)湿原
この地は材料屋としてスタートした最初の仕事「高溶接性 70 キロ高張力鋼板が水圧鉄管として使用された揚水発電所建設地。すぐそばには「鬼が面山」がそびえ、山麓の板室温泉の「赤滝温泉」は含鉄泉。

サラリーマン生活を終えるに当たって 是非行ってみたい所 沼原湿原
今はニッコウキスゲが花盛りの時期

6月の週末 6月14,15日

随分 世話になった「週末 JR 東日本 乗り放題全線パス」これを使って 岩手・山形へ行って来ました。
また、沼原湿原には すっかり引越しの準備を整えて 6月28日 家内と二人で出かけました。

4.1. 蝦夷の故郷 北上市 江釣子と鬼の館 2003.6.14.



北上川と和賀川の合流点から奥羽山脈を望む 北上市 2003.6.14.



奥羽山脈 和賀岳・焼石岳から流れ出た和賀川が北上川に合流する地域 そこはかつての「蝦夷 アルテイの根拠地」現在の北上市。和賀川の北側の段丘地「江釣子」には蝦夷の古墳群 そして江釣子から焼石岳の方へ約1kmの集落 は鬼剣舞の里 そこには北上市立鬼の館が建っている。



北上市 和賀川土手の背後の奥羽山脈と鬼の館

鬼の館で見た北上市の市民憲章には

「あの高嶺 鬼住む誇り その瀬音 久遠の賛歌
この大地 燃えたついのち ここは北上 」 と歌う。



蝦夷の遺跡 江釣子古墳群は 集落の林の中にひっそり ここからも蕨手刀などが出土した。
蝦夷の遺跡を意識して立たずんだのは初めて。 感無量でした。

蝦夷の遺跡 北上 江釣子古墳群

北上市 江釣子 蝦夷の古墳群
2003. 6. 14. 北上山地を縫うように流れ、北上川に一関市の西で北上川に流れ込む砂鉄川。
砂鉄川の名を地図で見つけ、北上川に合流する手前で深い渓谷を形成する狛鼻溪。

一度は大雨で引き返した北上市を今度はゆっくり歩き、和賀川と北上川の合流点にも行ってきました。

江釣子古墳群とその時代

Ezuriko Ancient Tumulus Groups and Their Period

和賀川流域の古墳群 (約1300年前)
Tumulus Groups on the Waga River Basin

古墳時代もようやく終りを告げ、飛鳥や奈良の都では
仏教文化の花開き、大きな宮殿や寺院が次々と建てられ
ました。東北北部に小さな古墳がさかんに造られたのは
そのころです。これらはエミシの酋長がその家系の墓と
考えられており、市内では和賀川流域の岩崎古墳群、そ
して江釣子古墳群(国指定史跡)が有名です。

岩崎古墳群は奈良時代以前に属し、旧来の土壌(穴)に
遺体をおさめ、縄文文化の石器(崩壊石)や古墳文化
の土器(土師器)や鉄器と一緒に副葬されていました。

一方、江釣子古墳群はやや新しく、川原石をならべて
積み上げた石室に遺体をおさめ、そこには装身具や刀剣
などが副葬されました。しかし石室の構造は独特であり、
また蕨手刀という特色ある刀も副葬され、岩崎古墳群と
ともにエミシの古墳としての特色を伝えました。

北上市古代遺跡分布図

4.2. 砂鉄川と狛鼻溪 2003. 6. 14.



北上山地 南端の山中を流れ、一関近傍で北上川に注ぐ「砂鉄川」
北上川との合流点近傍 東山町では谷が迫り 狛鼻溪という美しい溪谷をつくっている。
今はもう砂鉄が取れないが、透明な流れに砂鉄が沈積し、船頭が歌う民謡を背に川くだりの舟がゆく



和鉄のふるさと 「砂鉄川・狛鼻溪」 一関周辺で北上川に合流する砂鉄川

会社の同僚いわく

「狛鼻溪の川下り 酒ワンカップ 持って船に乗り込み 周りの景色をつまみに
船頭の歌う民謡を聞きながら 飲むワンカップ たまらん・・・」と。

私もその通りしてきました。



砂鉄川・狛鼻溪 川下り 2003. 6. 14.

砂鉄川の名の通り、今はもう 砂鉄が取れなくなると聞きましたが、川の淵の縁には砂鉄が堆積し、雲母がキラキラ光っていました。

渓谷の緑と砂浜の砂鉄と雲母が織り成す模様に見とれ、船頭の歌う民謡が渓谷にこだまして goo.



狛鼻溪 砂鉄川の川岸に堆積した砂鉄 狛鼻溪で 2003. 6. 14.
黒いのが砂鉄 キラキラ光る黄色いのが雲母

この狛鼻溪から里山の中を縫うように一関に向って走るバス。山間部を抜け、一関の盆地に出る山の出口が舞草。思いもかけず、舞草鍛冶・舞草刀の里「日本刀の故郷」舞草を通り抜けて 一関へ
やっぱり 砂鉄川の鉄が舞草の刀鍛冶を育てたのだろうか.....
船頭の歌った民謡が耳につきながら 砂鉄川・狛鼻溪の余韻にひた
一関の手前でバスの車窓を楽しみつつ一関に帰りました。



山裾に「舞草」の集落がある狛鼻溪→一関のバス車窓から

4.3. 蔵王連峰 縦走 2003. 6. 15.



蔵王連峰 お釜・五色岳を前衛に主峰 熊野岳を望む イワカガミ 縦走路で 2003. 6. 14.

昨年まであまり足を踏み入れていなかった山形。

米沢・横手・山形・鶴岡出かけましたが、いつも東北新幹線で眺めながら素通りの蔵王連峰
梅雨の雨上がり 山形から入って 蔵王のお釜 眺めてきました。

刈田岳一馬の背(お釜)ー熊野岳一地蔵岳ー蔵王温泉

山はイワカガミが満開。残念ながらコマクサはちょっと早くてダメでした。

ビックリしたのは 蔵王の最高峰 熊野岳の山腹はそれこそ 鐵スラグの蓄積と思えるガレの蓄積。

山形側の登山・スキー基地 蔵王温泉が含鐵単純泉であったことと考えあわせると蔵王もまた「鉄の山」



熊野岳の斜面 スラグ状のガレで覆われ、まさに鉄の山 含鐵泉の蔵王温泉を望む

安達太良・吾妻連峰そして蔵王連峰 栗駒・焼石岳から和賀岳から青森岩木山へと長々と東北の脊梁を貫く
奥羽山脈には鐵の鉱脈が続き、ここから流れたす川の 流域には砂鉄が産出。

これを目印に奥羽山脈に産鉄の民がわけいったことであろう。

「蝦夷の和鉄」をそんな風にイメージを膨らましながら 蔵王温泉の湯に入っていました。

「たたら」を訪ねながら 何時も 頭の片隅にあった問いかけ

「鬼は悪者か????」

「蝦夷」「鬼」に持つなんとはなしの後ろめたさ



江釣子 古墳群がある和賀川



砂鉄川



蔵王



北上市の市民憲章には

「あの高嶺 鬼住む誇り その瀬音 久遠の賛歌 この大地 燃えたついのち ここは北上」と高らかに歌う。

「鬼すむ誇り」と歌う北上市の市民憲章に「東北人の広さ」を感じました。

横手の街を歩いた時にもそう思いましたが、東北には今日本人が忘れかけている日本人の原点がある。もやもやも 吹っ飛んで、実に 爽快な walk で帰途につきました。

2003. 6. 15. 柏にて

Mutsu Nakanishi

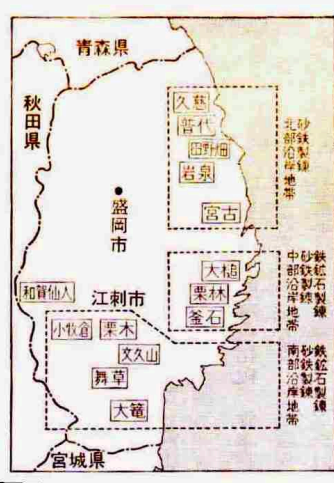
5.

田舎なれども南部の国は 西も東も金の山

岩手県・南部 蝦夷の鉄 北上山系 大槌・釜石へ

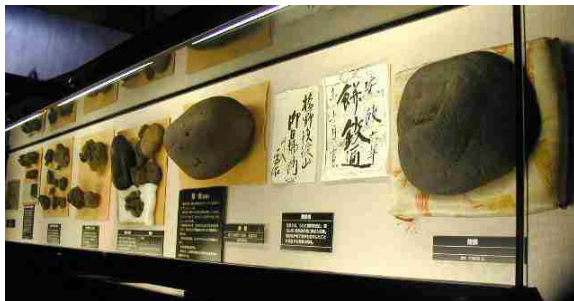
1. 蝦夷の鉄 北上山系南部の鉄
2. 古代 北東北の鉄生産（秋田・岩手・青森）
3. 釜石 鉄の歴史館に「餅鐵」を訪ねて
4. 古代 蝦夷の鉄 鬼伝説の街 大槌町へ
5. 北上は蝦夷の根拠地 もう一つの和鉄の故郷

1. 蝦夷の鉄 北上山系 南部の鉄



9.23. 津軽へ行った帰りに東北 和鉄の故郷 「大槌・釜石」へ行ってきました。
 約10年前 盛岡から北上山地をバスで越え、三陸海岸北部の山田から田野畑・久慈へ和鉄を訪ねた事があるのですが、今度はそれにつながる三陸海岸中央部 釜石へ

「蝦夷の鉄 餅鐵」 砂鉄と並ぶ和鉄の製鉄原料「餅鐵」
 この餅鐵 そして 蝦夷の鉄のロマンを訪ね 同時に今の釜石も見たくて・・・



鉄の歴史館に展示されている餅鐵
 製鉄遺跡が散在する「大槌・小槌」
 「餅鐵は釜石へ行けばゴロゴロしている」との話を聞いて 盛岡から汽車で東へ。北上山系の主峰 早池峰山の山裾 遠野を通って山中へ。



洋式高炉の近代製鉄発祥を支えた鉄鉱脈と高炉建設場所である深い山並みを海岸に出たところが釜石。この北上山地一帯は古代蝦夷の根拠地。古代「砂鉄 たたら」とは別に 蝦夷と呼ばれた人たちによって磨かれた独自の「鉄鉱石・餅鐵によるたたら」製鉄法があったという。北上山系の鉄・鉱物資源と森林資源は古代 蝦夷の宝であり、蕨手刀という強力な武器を持つ蝦夷が中央の大和朝廷と対峙した。

中世には この北上・南部の鉄製錬・鍛冶加工技術が日本中央や各地に持ち込まれ、出雲を発祥の地とする日本古来の砂鉄製鉄技術と融合し、飛躍的な製鉄技術の発展をみたといわれる。



遠野ー釜石間 千人峠近傍の山深い北上山脈 トンネルを抜けると釜石の街



そして、近世には この釜石で後背地の山から出る鉄鉱石を原料とした日本最初の洋式高炉による鉄生産がはじまり、今日の鉄鋼王国日本のスタートがきられた。

「西の奥出雲・中国山地 東北の南部 」 和鉄ルーツのロマンを秘めた和鉄の故郷である。



北上山系 釜石周辺の山には砂鉄と共に豊富な自然鉄（鉄鉱石鉱脈）があり、それらが川にながされて磨かれ『餅鐵』が作られ、北上山中から流れ出る川のあちこちには餅鐵があったという。

この餅鐵は容易に「野たたら」鍛冶製錬や鍛錬で鉄製品に加工することが可能であり、この技術を知った蝦夷は古代西から砂鉄製錬が持ち込まれる以前から独自の製鉄技術を

連綿と続けてきた。（確かな証拠はないが・・・）

そして、さらに西から入ってきた砂鉄製錬技術とも融合させてきたのではないかと・・・

北東北周辺に広く分布する蝦夷の武器「蕨手刀」には砂鉄製錬による鉄ばかりでなく、鉄鉱石精錬で作

られた鉄で作られたものが多く混じっている。

また 大和政権の奥州征伐後 奥州の鉄の工人が「俘囚」として日本各地に散らばっていった事 さらに「蕨手刀」工人の故郷「舞草」や「月山」の工人が中央に出て「日本刀」の原型が作られていった事などはこの傍証となろう。

また 釜石市の隣りの大槌町小槌の小林家に伝わる「小林家製鉄絵巻」では 餅鐵をではないかといわれる「六合吹き」の製鉄絵が描かれている。この絵巻には巻末に1126年に模写した事、巻頭の絵の余白



には「大道二酉歳二月十六日」との記載があると言われ、「大道二年」が「大同二年」とすると807年にあたり、そのまま信用は出来ないとしてもかなり古くから製鉄がこの地で行われていた事が推察される。

大槌町小槌の小林家に伝わる「小林家製鉄絵巻」

また 南部は「遠野物語」に代表される民話の故郷でもある。

古くから製鉄の故郷であるこの地（大槌町小槌）にも鉄と鬼との深い関係が語られた「鬼」の伝承もありました。（しおはまやすみ・船橋暉男「遠野上郷大槌町物語」柴田弘武著「鉄と俘囚の古代史」より引用）

北上山中から流れる川の流域から得られる餅鐵の秘めたロマン

でも この餅鐵が古代から現代まで 「悲劇の蝦夷」を含めて 日本誕生に果たした役割は大きい

深い深い北上の山中を抜け、狭い谷合いを甲子川に沿って拓がる釜石の街並みに入り、程無く釜石の市街と新日鉄釜石の工場が見えてくる海岸部の釜石駅。

釜石は考えていたより小さい街。駅前に広がる新生なった新日鉄釜石の工場には高炉が見えない。

何ともさびしい限りであるが、真新しい工場群と新しいショッピングセンターに新しい芽吹き。



釜石点描

釜石駅から 新日鉄釜石	新日鉄釜石 正面	釜石駅
釜石后背の鉄鉱脈の山並み	釜石湾	鉄の歴史館

田舎なれども南部の国は 西も東も金の山

岩手県・南部 蝦夷の鉄 北上山系 大槌・釜石へ

2. 古代 北東北の鉄生産（秋田・岩手・青森）

インターネット 岩手日報「岩手 21 世紀への遺産」&

「みちのくの鉄」（シンポジウム「今東北は燃えている ー」より）抜粋収録

kitatetsu.htm

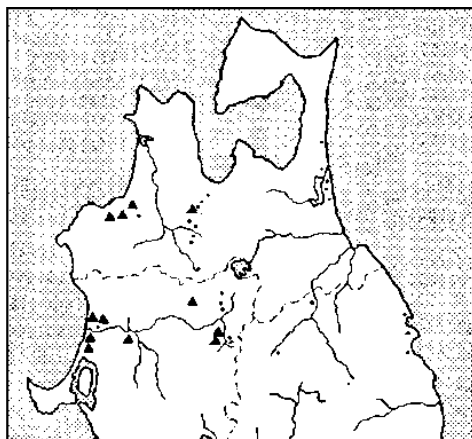
2002.10.1. by M. Nakanishi

東北地方の北部での鉄生産のはじまりは、大和政権が724年陸奥の支配強化と地方行政機構確立を目的に多賀城を建設した時に鉄生産にかかわる専門工人も多数移住させたのに始まると考えられている。しかし、東北南部ではそれ以前から既に鉄生産が開始されており、福島県浜通りの武井地区製鉄遺跡群や金沢製鉄遺跡群では多賀城建設以前の7世紀～10世紀まで製鉄作業が行われていたことが確認されている。

多賀城跡付近東約4 kmに存在する柏木遺跡では4基の製鉄炉、5基の木炭窯、鍛冶工房などが発見され、その製鉄炉は福島県相馬地方や群馬県の製鉄炉の系譜を持つ円筒形の縦型炉であることから、関東・東北部の技術移入が基礎にあったと考えられる。

東北北部岩手・秋田・青森での鍛冶・製鉄が広くおこなわれるようになったのは8世紀大和政権が多賀城を建設以降である。岩手県の三陸沿岸部宮古市から山田・大槌町にかけてからはチタン分の少ない良質の砂鉄が採取され、製鉄や鉄加工が早くから行われ、鉄滓、羽口を出土する遺跡がいくつか存在する。8世紀代の製鉄炉 山田町上村（かみむら）遺跡をはじめ、大槌町夏本遺跡では4基の鍛冶炉が検出され、山田町山ノ内遺跡・宮古市島田遺跡など製鉄遺跡が11世紀代まで継続することが明らかになってきた。

岩手県北上川流域の製鉄遺跡としては、大瀬川遺跡があり、3基の竪形製鉄炉と考えられる遺跡が発見されているが、製鉄の詳細は不明である。当時は沿岸部が鉄の供給地として重要な位置を占めていたと思われる。



▲ 製鉄遺跡 ● 鍛冶工房と思われる遺跡
東北地方北部の古代鉄生産関係遺跡

秋田、青森県地方の鉄生産については、最近、古代の製鉄遺跡が次々に発見されている。

9世紀前～中頃秋田城に関連したものと推測される秋田市坂ノ上E遺跡では住居跡、竪形炉と木炭窯が一つずつ発見される。

また、その後 米代川流域と津軽の岩木山麓を中心にした地域に10世紀～11世紀頃と推定される竪形炉を有する製鉄遺跡群が発見されている。集中する

- みちのくの鉄

<http://www.iwate-np.co.jp/isan/isan711.html>

（シンポジウム「今東北は燃えている ーみちのくの鉄の歴史ー」より抜粋）

- 岩手日報 「岩手 21 世紀への遺産」

<http://www.iwate-np.co.jp/isan/isan711.html>

エミシの生業ー沿岸部の鉄生産

田舎なれども南部の国は 西も東も金の山

岩手県・南部 蝦夷の鉄 北上山系 大槌・釜石へ

3. 釜石 鉄の歴史館に「餅鐵」を訪ねて



【釜石湾 鉄の歴史館より】



【 釜石： 蝦夷・南部 鉄の故郷 近代製鉄発祥の地 】

釜石は海岸まで山が迫っており北上の山から、今 車で下ってきた狭い谷合いを流れる甲子川沿いと河口のみが平地でその狭い場所に釜石製鉄所・市街地・港があり、釜石湾のみがオープンであとは山また山である。思ったより狭いが、放射状に街があり、その向こうに釜石湾が広がっているのも明るい。日本近代製鉄発祥の地であり、 出雲の鉄と並ぶ和鉄の故郷 東北「蝦夷の鉄」の本拠地・南部鉄 等々釜石への思い入れは強かっただけに「やっと来た」の思い。 是非「餅鐵」にもしっかり会いたい。

釜石は日本近代製鉄発祥の地

江戸時代 末期 洋式の製鉄技術を学び、反射炉の操業に成功した大島高任(盛岡出身)が、良質の鉄鉱石が出る釜石に洋式高炉をつくり、安政4年12月1日、釜石の後背地の山大橋産の磁鉄鉱を用いた銑鉄の製造に成功。これが日本における近代製鉄の始まりで、この日を「鉄の記念日」としてその功績を今に伝えている。その後、釜石は常に日本の製鉄業の中心的な存在として日本近代製鉄の歴史を作ってきた。そして釜石にはこれらの鉄の歴史を展示した釜石市立「鉄の歴史館」があり、まず、鉄の歴史館を訪ねてそれから大槌の街にも立ち寄りたい。



現存最古の橋野洋式高炉跡



釜石後背の北上山系の川から採取された餅鐵

3.1. 釜石市立鉄の歴史館



釜石駅からタクシーで約 10 分 新日鐵の工場に沿って海岸の方にて 海岸に出る手前で南側の岡へ登って行く。正面には 釜石湾が広がり、その中央の突き出た半島には大きな釜石観音の大きな像が海を見下ろしている。素晴らしい眺め。 背後は釜石の鉄を支えた北上の山々が連なっている。その高台を登った位置に鉄の歴史館が横に鋭い三角形の塔と円筒形の本館が組み合わされた立派な建物が小高い丘のてっぺんに建っている。

「鉄の歴史館」は日本ではじめて洋式高炉を築いた高島高任の偉業とその後の幾多の先達の業績を中心とした鉄の総合的な資料館で、原寸大の高炉の復元模型を中心に大島高任の日本初の洋式高炉についての各種資料やその後の釜石近代製鉄産業の発展（官営から民営やがて近代製鉄までの変遷）がパネル等で展示されている。



大槌町 小林家蔵 古代の製鉄絵巻

3.2. 史跡 橋野高炉群跡 陸中大橋近傍

遠野から東へ北上山系の分水嶺を越えて釜石に入るあたり一帯の山は磁鉄鉱と黄銅鉱を主とする鉱石が豊富に埋蔵されている。日本初の洋式高炉（大橋高炉）橋野高炉群跡は、この山中にあり、釜石から北へ約36Km、標高560mの山地にある。



洋式高炉を支えた鉄鉱脈



陸中大橋 釜石鉱山近傍の北上山系 山中



この豊富な鉄鉱石を原料に安政3年 高島高任によって、日本初の洋式高炉（大橋高炉）が建設。その後この山中 大橋に3座、橋野に3座、左比内に2座、栗橋及び砂ばん子渡に各1座合計10座が良質豊富な鉄鉱石の産地を背景にいずれも高任の指導によって建設された。これらの高炉は鉄鉱石を原料とし、銑鉄の製造に成功した我が国最初の洋式高炉である。

かくして我国近代鉄鋼業は深い山々に囲まれたこの地にその発祥をみ、やがて明治維新を迎えるや、官営製鉄所の発足となり、釜石製鉄所の礎を築いたのである。

● 釜石鉄山大橋高炉跡地



● 橋野三番高炉跡



3.3. 蝦夷の鐵餅鐵



餅鐵(米鐵) **餅鐵**

梶野、栗林の川で採取したもの。
餅鐵の名称は製鍊した鉄の性質が
粘性に富むことから由来し、形状
からきたものではない。

分析表	Fe	C	Si	Mn	P	Su	Ti	S
単位	wt%	wt%	wt%	wt%	wt%	wt%	wt%	wt%
	89.54	1.85	0.41	0.33	0.121	0.13	0.004	0.005

鉄の歴史館入口を入ったところに大きな「餅鐵」が飾ってある。大きい。。。。

館内には後背地の北上山系から流れ出るかわの流域から掘り出された沢山の餅鐵が展示され、これらが洋式高炉の原料として重要な役割を果たしたことが展示されている。

「餅鐵」については 古代から東北のたたら製鉄には出てくるのですが、私にとっては本当に不思議でよく判らなかった製鉄原料。

砂鉄・鉄鉱石たたらと同時に東北では餅鐵を使ったたたら製鉄があるという。

また まん丸の形で川にゴロゴロあり、それを加熱鍛冶製鍊したり、鍛鍊するだけで容易に鉄加工素材に出来るとも聞きました。

今までに幾度か 展示されている「餅鐵」を見たことあるのですが、見ただけではよく判らず。

沢山の「餅鐵」が産出場所と共に解説付で展示されていてやっと理解できました。



【釜石後背の北上山地と餅鐵が出る川】



【甲子川と後背の山々】

餅鐵とは
山中に鉄鉱石（磁鉄鉱）鉱脈としてねむっていた鉄鉱石が川に流され、流れ下る過程で磨かれ丸くなったもの。
従って 鉄鉱石（磁鉄鉱）の鉱脈がある山から流れ下る川の流域で産出される。鉄分は 70%を超え、非常に純度が高い。
釜石の後背地の北上山系には大規模な磁鉄鉱の鉄鉱脈があり、ここから流れ下る甲子川や鶴住居川・小釜川などの流域で産出される。

餅鐵(米鐵)

餅鐵を釜石・梶野・栗林地方では「へいてつ」や「べんてつ」と呼んでいる。
東北地方一帯でもさまざまな呼称があり、「べんてつ」「こくてつ」「まぐる」「ぼふんてつ」「すえひろがね」「おもいし」ともいわれる。
磁鉄鉱石が長い間、川の流れにもまれて丸みをおびたもので、専門的には「円礫磁鉄鉱」あるいは「磁鉄鉱礫」と呼ばれる。
鉄分の品位は優れ、リンやイオウといった不純物が少ない。鉄分の含有率は約70%。

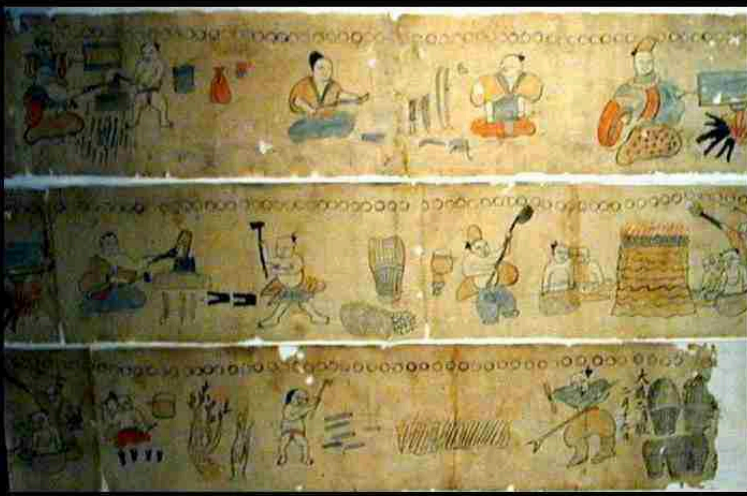
東北にはほかにも 餅鐵は北上川や秋田県米代川流域などで産出すると聞きましたが、資源が偏在するのもこれで理解。

70%を超える鉄分と高純度は砂鉄では得られぬものであり、砂鉄に替わる近代洋式高炉の原料としてこの釜石の鉄鉱石が浮かび上がり、かつ 釜石の地に洋式高炉が立てられたのも、釜石の后背の山中で大鉄鉱脈が発見された事と共に、古くからこの餅鐵が製鉄原料として使われてきた歴史があったためと考える。

思っていたものよりも 大きいもの 細かいもの 色々あることも判りました。

また、鉄の歴史館のパネルの中にもう十年ほど前 久慈市の川鉄たたら館の入場券に使われていた「六合吹き」の図を見つけました。

大槌町小鋸 小林家蔵の製鉄絵巻で巻頭に少し疑問はありますが 807 年の銘がある製鉄絵巻の一部たたら製錬の部分を取り取ったものであること初めて知りました。



小林家製鉄絵巻 釜石市立鉄の歴史館パネルより
大槌町 小鋸在 蕨打直 小林孫右衛家 1126年の模写絵



野たたら六合吹き図
左側 烏帽子をかぶった吹棟梁
中央 6名の番子
右側 原料を投げ入れる作業長

小林家製鉄絵巻 釜石市立鉄の歴史館パネルより
大槌町 小鋸在 蕨打直 小林孫右衛家 1126年の模写絵

巻頭 「大道二酉歳二月十六日」の銘
大道二を大同二とすると807年にあたる
但し、大同二年は亥年で疑問は残る



製鉄絵巻巻頭にある
807年の銘
小林家蔵 大槌町小鋸

807年は疑問があるにしろ、古代 大和勢力が東北に勢力を及ぼす前 この地方には既にこの「六合吹き」図に見られる餅鐵を製鉄原料とするたたら製鉄があったのではないか・・・

蝦夷の武器 蕨手刀には 餅鐵・鉄鉱石原料の鉄製品が多数混じっているという。

又、釜石の隣町大槌町小鋸には この地名の由来となった「鬼伝説」があり。

「北上山系橋野の鬼が畿内からやって来た鍛冶屋の技術を毎夜毎夜盗みに来て退治される」鬼伝説を伝承。これもたたら製鉄黎明の古代 西日本からの砂鉄製錬と餅鐵製錬の鍛冶師の争いではなかったか・・・

餅鐵を通じて 古代蝦夷と呼ばれた人たちの時代に既に釜石には餅鐵を原料とする独自の製鉄技術があり、その鐵が蝦夷と呼ばれる人たちの力の大きな源泉でなかったか・・・



鉄の歴史館 監理員の留畑昌一氏に大変お世話になり、餅鐵について色々教えていただいた。

氏は植木鉢など簡単な縦型実験炉での古代たたら製の鉄実験を指導されており、「餅鐵は素人では見つけにくい、今も釜石後背地の川の流域に行けば採れる。」と先週行かれて採ってこられたバケツ一杯の餅鐵をひょいと見せていただいた。

また 簡易実験炉なども見せていただき「餅鐵が非常に原料として良い」事教えてもらった。

植木鉢を炉底とした簡単な炉で鉄が作れるなど思いもよらなかった。ビックリするとともに 古代の十分温度の上がらぬ「野たたら」でも餅鐵を原料とすれば 鉄が作れる事の証明かも・・・と思いました。

でも、同じ餅鐵でも 産地が違うと製錬の容易さが非常に違う事を簡易実験炉で経験していると。

餅鐵を砕いた製鉄原料や実験炉・餅鐵さらには 餅鐵のある沢の写真など現物を見せていただきながらいろいろ熱心に教えていただき 餅鐵の疑問もほぼ解消。本当にありがとうございました。

砂鉄だけが原料でない事鉄原料・鉄素材としての餅鐵の優秀性など本当に思いもよらぬ事でした。

やっぱり イメージだけではだめですね・・・これもつくづく思いました。

帰り際に ひょいとちいさな餅鐵一つ 氏から戴いて帰りました。

よっぽどほしそうに見えたのでしょ。でも 感激です。

早速帰って磁石に引っ付けたり、感触を楽しんだり、古き蝦夷の時代をいめーじしたり・・・色々楽しんでます



日本初の洋式高炉が作られた釜石
 近代製鉄の父と称される高島高任は、南部藩家臣に洋式高炉を建設し、安政4年12月1日(1858.1.15)わが国で初めてこの鉄鉱石精錬による出鉄操業に成功。
 このほか福野・佐比内・黒林・越小瀬にも高任の指導で10座の高炉が築かれました。

◎22 訪れた「鉄の歴史館」で「餅鐵」のことや植木鉢三二高炉での製鉄実験など実物を見せていただき、色々教えていただいた監理員の留畑 昌一氏、すっかり、お世話になりました。



大徳町 小林家蔵 古代の製鉄絵巻

田舎なれども南部の国は 西も東も金の山

岩手県・南部 蝦夷の鉄 北上山系 大槌・釜石へ

4. 古代 蝦夷の鉄 鬼伝説の街 大槌町へ



【 大 槌 町 】

せっかく釜石まで来て やっぱり古代製鉄遺跡の街 大槌町には寄って帰りたい。

大槌・小槌と製鉄と関係する名前がついている町。大槌。

大槌・小槌が古い和鉄・たたらと関係のある地名であり事は知っていましたが、この地名が鬼伝説と密接にかつながらしていることつい最近まで知りませんでした。

古代 北上山中にやって来た製鉄の民が この山中の餅鐵と出会い、蝦夷と呼ばれる人たちの鉄を育ててきた。その過程で起こる幾多の争い。それが、鬼伝説としてこの大槌の街にも伝承されています。

釜石の隣町ですが、一つ汽車を逃すと柏まで帰れない。釜石駅で時刻表を眺めるが妙案無し。

北へリアス式海岸の山の中を汽車で大槌駅まで行って 約 40 分大槌町にいて下りの汽車で釜石まで戻りそのまま盛岡行の急行に飛び乗る。汽車の中から、たたら遺跡がいたるところに散在しているといわれる大槌町の後背の山・鶉住居川・小槌川を眺める事にする。



小槌川周辺



鶉住居川周辺



釜石—大槌 海岸を望む



【鬼伝説の周辺で 釜石—大槌 の 車窓より】

釜石駅を甲子川沿いに少し引き返し、遠野への鉄路とわかれ 直ぐ北へカーブ。すぐトンネルに入って山中へ。チラッと海が見えたと矢思うとまた山の中。約 15 分で大槌町へ
駅には観光案内版があるが、ここがかつて和鉄生産の宝庫であったことを示すもの何も無し。大槌町の由来となった鬼伝説もまったく痕跡無し。

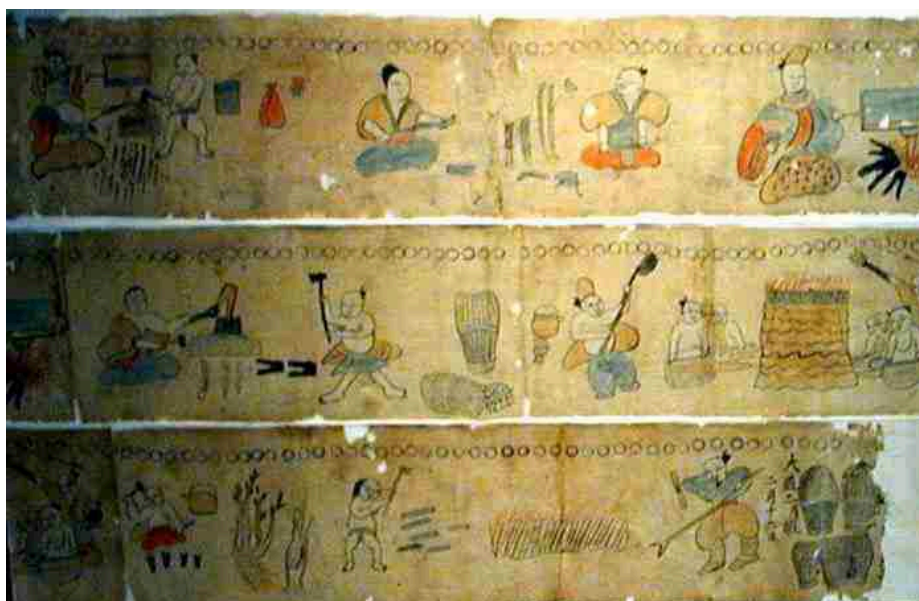
駅の越線橋から後背の山々を眺め、古代の鉄のイメージ膨らまし、汽車で引き返し、小槌川・鶴住居川に眼をこらす。

小さい川ではあるが川原が広く 川筋の奥にどっしりと北上の山々が控えている。

この奥が釜石の鉄を支えた鉄の山。蝦夷の宝かも・・・。

鬼伝説の山にふさわしい奥行き・・・。

次回はゆっくり 歩きたい。そして 山田へも



大槌町 小槌 小林家蔵 古代の製鉄絵巻

大槌町に伝わる鬼伝説

「遠野上郷大槌町物語」 しおはまやすみ・船橋暉男著

柴田弘武著「鉄と俘囚の古代史」より引用



野たたら六合吹き (小槌 蕨打直 小林氏蔵 製鉄絵巻より)



小槌川・大槌川 概略



大槌町

「遠野上郷大槌町 物語」

「小槌川の川下より川上に向いて左の山を葡萄森という。土地の人これをブタ森と呼び、鵜の住居村との境をなす。

の家の仕事場を窺い見る鬼が現われ、やがて屋の柱をゆするなどの狼藉を働く。鍛冶屋ついに怒り、手に持ちし大槌・小槌にてその鬼を叩きしという。

鬼は頭を打ち割られ、大いなる声を発して飛び上がり、そのはずみにて屋根を突き抜け、山奥目指して逃げ行きぬ。鬼は逃走の途次も小槌川中流の蕨打直にて川前の一軒の家に打ち当たり、その家を壊し、山向こうの橋野の方へ去れり。鍛冶屋は手負いせる鬼の行方突きとめんと・・・・・・弓箭を携えてやまに入る。されど鬼の行方ついに分明ならず。

後に橋野人の伝えしは橋野の山奥、笛吹峠に近き山中、片羽山といえる山の麓にて、鬼の仰向きになりて死せるを見たりと。この地を誰いうとなくアオノキの地という。今日の青ノ木なり。

鍛冶屋はその後家業に精出さんと思立ちしも、その手に大槌・小槌を持つたびに打ち殺せし鬼の思い出されて気色悪し。ついに鍛冶を廃業せんと鬼を打ちし大槌・小槌を家の前を流るる川中に打ち捨てり。鉄にてつくりし小槌はその川底に沈み、木にてつくれる大槌はその川面に浮き、流れて海へ出でしが、後ふたたび潮により岸に戻され、一つ北の川筋の河口へ漂い着けりという。

これにより土地の人、誰言うもなく小槌の沈みし川を小槌川、大槌の漂い着ける川を大槌川と呼びならわすようになれりとぞ。」

田舎なれども南部の国は 西も東も金の山

岩手県・南部 蝦夷の鉄 北上山系 大槌・釜石へ

5. 北上は蝦夷の根拠地 もう一つの和鉄の故郷



古代「西から製鉄技術が伝えられる前に東北には製鉄技術はなかった」との説が有力であるのも承知しているが、古代東北で育まれた「餅鐵を原料とした製鍊・鍛冶鍛鍊技術」「蝦夷の鉄として捨て去られたように見える技術」これも又 和鉄の源流。

この蝦夷の鉄加工技術が蕨手刀を生み 出羽月山や舞草の刀鍛冶を生み そして日本刀の源流となって行く。

ここにも 鬼がいたが 鬼が築いた伝統の技が日本のルーツとして生きている
釜石に行ってそんな意を強く思った。

それにしても 北上の山は深い。緑の山の中をどんどん汽車が登ってゆく。釜石鉱山の事務所の写真探ろう 仙人峠の写真 深い山並み あっという間にトンネルや山肌で隠れてしまい写真とれず。



汽車と山とがあまりにも近い。本当に北上は深い山 鉄の山

『田舎なれども 南部の山はよ 西も東も 金の山』
やっと峠を越えて 視界が開け 早池峰の山々が見え出し、遠野の盆地へ入っていった

2002.9.23. 蝦夷の鉄 餅鐵を釜石に訪ねて

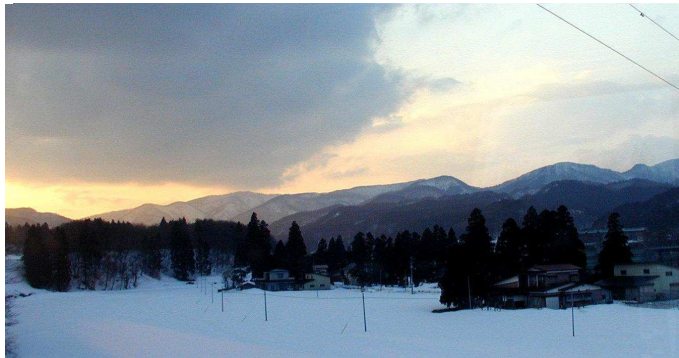
田舎なれども南部の国は 西も東も金の山

岩手県・南部 蝦夷の鉄 北上山系 大槌・釜石へ

【 完 】

古代 出羽国 秋田 和鉄の道を訪ねて

北上川流域の陸奥から奥羽山脈越 出羽・秋田そして津軽十三湊へ
奥羽山脈越えの和鉄の道は蝦夷の生命線

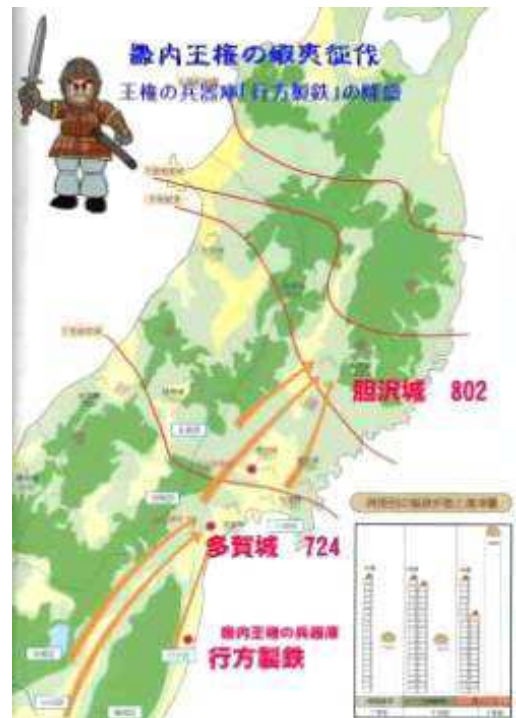


北上市和賀から奥羽山脈を望む 2003. 3. 15.

1. 古代出羽・秋田の産鉄は蝦夷の生命線
2. 秋田の古代製鉄遺跡群が眠る秋田の丘陵地
 - ◆ 木村清幸氏「八郎潟東岸の古代製鉄遺跡と地名」より概要抜粋
3. 秋田の街に製鉄遺跡を訪ねて 2003. 3. 15.
 - ◆ 秋田大学鉱業博物館・古代秋田城遺跡・製鉄地名の残る金足集落

1. 古代出羽・秋田の産鉄は蝦夷の生命線

この和鉄の道での鉄の覇権をかけた争い



古代奥州では奥羽山脈を背骨として山脈から流れ出る大河の流域は蝦夷の支配地で独自の文化を育んできた。

西側 陸奥国 北上川流域並びに東側 出羽国 最上川・雄物川・米代川流域などである。

この奥羽山脈には黒鉱脈が走っており、鉄・金・銅などの鉱物資源が有り、蝦夷の重要な公益品であり、蝦夷の力の源泉であった。

山でこれらの鉱物の採取加工に携わる山夷と河の流域で農耕に携わる田夷とが多くの部族に分かれて生活していた。

古代 秋田は蝦夷の支配地 出羽国 雄物川の河口日本海海岸に位置している。

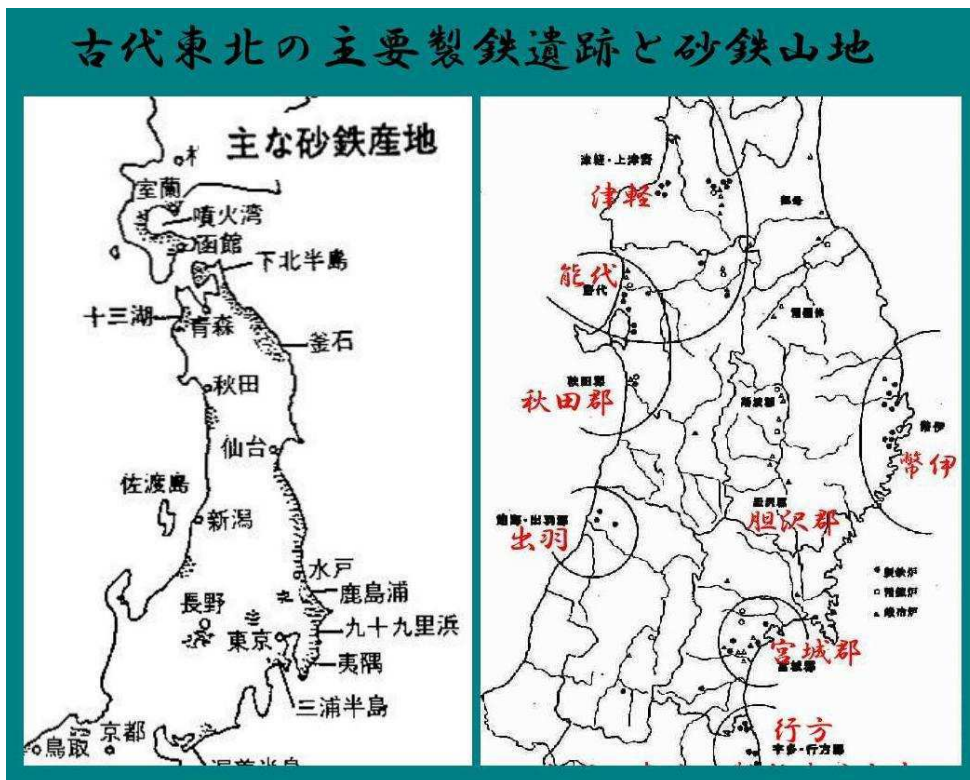


当時の日本のメインロード東国から蝦夷の最前線陸奥国北上川流域に入り、そこから奥羽山脈を越えて出羽国を通り日本海側に出て、蝦夷の国際貿易港である津軽十三湊への要衝の地にあり、まさに蝦夷の生命線重要路に位置している。

採取された鉱物資源 鉄・金・銅などが、このメインロードを通して十三湊で取引されたという。鉄はもっとも重要な交易品であり、この道はまさに蝦夷の和鉄の道。

蝦夷は奥羽山脈山中の鉄川の流域・海岸の砂鉄を原料にして鉄精錬・鍛冶加工を行い、自らの武器・農耕具として使うだけでなく 交易品として和鉄を産した。蝦夷の武器 蕨手刀の優秀性はその後の日本刀に大きな影響を与えた。

7世紀中頃からの中央政権の奥州征伐により大量に発生したこの蝦夷の鉄の工人たちが、日本各地に連れていかれ、その後の日本各地の和鉄精錬 鍛冶加工の発展に大きなやくわりを果たしたことは良く知られ、蝦夷地の製鉄技術の優秀性を示す良い例である。



図にインターネットで採取した古代東北の製鉄遺跡分布を示した。

7世紀半ばからの中央政権の奥州征伐も基本的にはこの蝦夷の持つ鉄を中心とした鉱物資源の支配が目的と考えられている。

7世紀 越の国の安倍比羅夫が海岸ぞいに北上し、出羽・能代・津軽の蝦夷を恭順させ 俘囚化したのを皮切りに奥州征伐を繰り返しこれらの地方の蝦夷を従属させていった。

7世紀から9世紀にかけての奥州征伐・奥州支配の戦いが繰り返され、その征伐の進行北上にあわせ、中央政権は奥州各地に柵をつくり、支配をつよめていった。

しかし、蝦夷は統一された国でなく、いくつもの集団に分かれた部族集団であり、優秀な蕨手刀などの武器で反抗もしたが、次第に俘囚として集団ごとに中央政権に組み入れられてゆく。

すなわち、産鉄を背景にした交易など蝦夷の力は強く 中央政権としてもこれら蝦夷をねじ伏せる事ができず。征伐とはいえ、直接支配できずに懐柔策として、その地方の豪族を俘囚長にして恭順した蝦夷部族を俘囚として支配していったのである。

蝦夷の強力なリーダー 胆沢のアテルイ・和賀のモレが坂上田村麻呂にやぶれ、京都で処刑された後は蝦夷の勢力は次第に弱まり、陸奥は安倍氏 出羽は清原氏といった俘囚長の下にたばねられ、中央政権の支配下に入っていった。



そして この俘囚長を通じた中央政権支配のため、多賀城をスターに 北上川流域には胆沢城 志波城などが作られ、出羽の国にも雄勝城・金沢城・秋田城が次々と作られていった。 中央政権がこれらの城で地方経営を行うと共に蝦夷の手に産鉄の支配が奪い返されるのを恐れ、これら辺境の地での新たな製鉄基地を作る事を禁じ、鉄の工人を集め、直接これら城の中で鉄鍛冶・精錬を行うなど鉄の支配を強め、また、反抗した蝦夷の俘囚は西国へ兵士・製鉄の工人として送られていったといわれている。

この俘囚長支配の中で、蝦夷部族間の争いもたえず 出羽の俘囚長清原氏と陸奥の安倍氏の争い前九年の役 清原氏の内紛後三年の役を経て安倍氏の系統である奥州藤原氏がこの鉱物資源の覇権を握り栄華を極めてゆく。そして中央政権が直接支配が出来るようになるのは 奥州藤原氏が鎌倉政権に打たれる中世になってからである。

奥羽山脈が中央を貫く奥州は古代から 蝦夷にとっても中央政権にとっても宝の山。この覇権をめぐる古代史を彩る壮絶な戦いが繰り広げられた。

奥羽山脈を東西に横切る幾筋かの険しい山岳道はその歴史を刻む奥州和鉄の道 この道は今も新幹線・高速道路が越えて行く重要交通路 そんなこと知る由もないが、昔も今も時代の

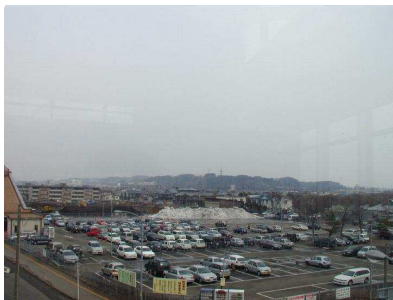


流れを吹き込む通商路・文化の道であることに代わりはない。

これらの地を訪問した三月の半ば 奥羽山脈は深い雪に閉ざされ、一筋の鉄路だけが国をつないでいた。
しかし、平野部に下るともう雪が消えて 早春の明るい景色
横手の街のあちこちの商店では 蝦夷のリーダー「アテルイ」の長編アニメ映画 鑑賞会の切符販売が
売られていた。

蝦夷の歴史を知れば知るほど 鬼といわれる蝦夷がいとおしくなる。鬼は悪者か・・・
今 問答無用の戦争がはじまっている。何か智慧はないのか
縄文のサークルにかけた平和の思い 蝦夷の生きた奥州古代 何かヒントにならないか・・・

2. 秋田の古代製鉄遺跡群が眠る秋田の丘陵地



秋田駅より 北の丘陵地



古代秋田城遺跡



金足から八郎潟東岸に続く丘陵地

7世紀後半から中央政権は この奥州・蝦夷地の鉱物
資源・鉄の覇権を求めて蝦夷征伐を繰り返し、その支配
を強めていった。

秋田での支配の中心としてこの地に 733 年出羽柵が建
設され、760 年頃より秋田城と呼ばれるようになった。
秋田市内及び秋田市の北の丘陵地から八郎潟の東岸地
域にかけては数多くの製鉄関連地名群がある。

一方 数はすくないが、 この地域から古代の製鉄遺
跡も出土し、この地域が古代からの製鉄基地であった
事がうかがえる。

秋田・八郎潟東岸の製鉄関連地名群分布を調べ古代鉄生産の可能性を詳細に検討した木村清幸氏の研究
があり、それを引用紹介することで、 蝦夷征伐の推進 そして その押さえの中心となった秋田城が
建設され、中央律令政権の支配が進む 8,9 世紀からの古代秋田・八郎潟東岸の地域にあった和鉄生産基
地の状況を眺めたい



秋田市泉周辺 秋田市内金砂神社



秋田駅より西の丘陵地



金足付近 八郎潟東岸丘陵地



秋田市内に見える製鉄関連地名



秋田市北部 金足から昭和町への丘陵

◆ 木村清幸氏 「八郎潟東岸の古代製鉄遺跡と地名」より概要抜粋



「秋田地名研究年報」第15号

<http://www5.et.tiki.ne.jp/~koremaru/chimei/nenpoxx/nenpo15/KIMUr.htm>



表 秋田・八郎潟東岸の製鉄関連地名群分布

● 鉄の原料である砂鉄や材料に係わる地名。 蟹沢、金ヶ沢、砂子沢（いなごさわ）金山（かねやま）など	31ヶ所
● 製鉄炉や鉄の生産加工に関連する地名。 踏鞴（たたら）、大平（おおひら）、雷（いかづち）、鍛冶屋敷など	26ヶ所
● 生産された鉄製品の流通を仲介したとみられている神人（じじん）と関連した地名 八田（はった）、神田（かんだ）、飛鳥田（あすかだ）、八幡田（やわただ）等	20ヶ所
● 製鉄や須恵器の生産技術を持つ工人集団の出自を表わしたとみられる地名。 泉、今泉、小泉、泉田、泉八日、泉沢、寒川等	11ヶ所

須恵器の生産工人集団や鉄生産工人の多くが五畿の和泉国や今木郷の出自であったことから

工人達の出身地である「泉」を、百済王に近い鉄工人集団は「寒川」地名を鉄生産の居住地へ出自に因んで付した

表 秋田周辺の古代製鉄関連遺跡の分布状況

● 鍛冶遺構や精錬窯等が出土して古代鉄生産活動が確認できる遺跡 琴丘町堂の下、泉沢、八竜町扇田谷地、能代市寒川、秋田市諏訪の沢、秋田城	六ヶ所
● 製鉄のための鍛冶用炭窯遺構が確認できる遺跡 秋田市大平、能代市十二林、琴丘町堂の下	三ヶ所
● 鉄生産に付随する須恵器の製造を行なう須恵窯が存在 秋田市上新城松木台、大沢、下新城末沢、槻木、手形山、濁川、 昭和町元木、能代市十二林	八ヶ所
● 刀子や鉄器類、須恵器が出土する古墳群に近い遺跡。 五城目町岩野山古墳群、井川町飛塚古墳群。	二ヶ所

このように製鉄に関連する地名群は八郎潟東岸の丘陵部を縫うように北上している。
八郎潟東岸部で合計二十カ所とこの地域が古代製鉄の生産基地であったことがうかがえる。

これらの結果を基に製鉄遺跡を中心にして鉄関連地名の分布を調べてみると、南から北へ八郎潟東岸には6つの製鉄地名群の存在が地域性を持ちながら読取ることができる。

表 八郎潟東岸に存在する6つの製鉄地名群

第一群	秋田市上新城の松木台遺跡（八世紀中葉）須恵窯を中心に芋地、閩金、大平、 雷田、保多野、雷、泉沢の地名が分布する一帯。
第二群	秋田市金足の大平遺跡と昭和町元木遺跡に連なる丘陵地で、蟹沢、金ヶ崎、大平、 砂子沢、山王田、神田、小泉、八幡田等の地名が分布。
第三群	井川町飛塚古墳群跡に連なる丘陵地帯。飯田川町金山、糠塚森、蟹沢、昭和町泉沢、 小泉、山王田、井川町大平、赤沢、大菅生、小泉、泉沢の小地名が分布。
第四群	五城目町岩野山古墳群跡周辺一帯。五城目町蟹沢、金ヶ沢、菅ノ沢、雷、大平、 八田、泉田、磯の目、踏鞴沢といった地名が分布。
第五群	琴丘町堂の下遺跡、泉沢中台遺跡、八竜町扇田谷地遺跡一帯。琴丘町金畑、小金畑、 たたら袋、砂子沢、山本町今泉、泉八日、飛塚、蟹子沢、金山、赤川等の地名が分布。
第六群	十世紀後半の操業年代と推定される能代市寒川、十二林遺跡付近。 この洪積台地一帯には、蟹子沢、船沢、赤川、逆川、塩辛田、小野沢、福田等の 製鉄生産の施設関連地名が多く分布しているのが特徴である。

鉄の一回の生産には鉄資源としての砂鉄が4300貫（約16.1トン）鍛冶炭が4250貫（約15.9トン）を必要とすることから砂鉄より鍛冶炭の資源となる木材の枯渇によってその生産基地を移動せざるを得なくなる。

これを手がかりにすればこれらの古代製鉄関連地名・製鉄遺跡分布とその年代を重ね合わせると製鉄の工人が歩いた道筋が見えてくると木村清幸氏はいう。

この鉄工人集団が移動する際に工人達が居住していたことを示す地名が各地に残されており、その地名を手掛かりに集落分布を辿ってみると鉄工人の通った道筋が見えてくる。

これをこの秋田・八郎潟東岸の製鉄遺跡群にあてはめると次の二つの集団の道筋が見える。

製鉄関連地名から読み取った 古代 八郎潟東岸の製鉄集団の足跡

● 居住地の和泉国の「泉」を地名に付して移動している工人集団

秋田城に近い秋田市泉の泉山周辺を起点に、秋田市五十丁・泉沢、秋田市金足・小泉、昭和町上虻川・小泉、泉田、井川町北川尻・泉田、黒坪・小泉、五城目町高崎・泉田、山本町下岩川・今泉、森岳・泉八日、琴丘町鹿渡・泉沢に至まで、この「泉」を付した地名が八郎潟東岸を徐々に北進し工人集団の移動した道筋が読取れる。

● 百済王の一族で東国を経て出羽国に来た寒川工人集団

秋田市の鍬代山を中心に太平・目長崎と下北手・寒川付近で長期間に渉る鉄生産を行い、元慶の乱が終息した後に鍬代山から北の能代市寒川付近へ移動。規模の大きな製鉄生産施設の跡が発掘されて、ここにも工人集団が北進した道筋が見える。

緻密な地名解析にビックリすると共にこの木村氏の製鉄解析で解き明かされたごとく古代秋田には永年にわたって鉄の生産基地があったことがうかがえる。

都からも奥州支配の拠点多賀城からも遠く離れた奥羽山脈の山影 出羽国に置かれた秋田城はまさに蝦夷の生命線と鉄の道にらみを聞かす一大拠点であったろう。

また、秋田城の中に鍛冶遺跡があるが、朝廷か蝦夷征服後 鉄生産基地が蝦夷に落ちるのを恐れて、辺境の地で独自の鉄生産を禁じ、自ら城の中で鉄生産加工をやった痕跡であろう。



秋田城遺跡 と 秋田城政庁後 発掘現場 2003. 3. 15.



丘陵地の一角にある秋田城そして鉄の工人集団が住んだという秋田市金足

どこまでも続くまだ春浅い丘陵地を歩くとここがそんな古代日本の歴史を飾る桜舞台とはとてもおもえぬのどかな林の中である。また、この明るい丘陵地の林の中にと奥州征伐という当初抱いていたことばのイメージとは何か違う蝦夷と中央政権との関係を感じている。

秋田からその後金沢柵があった出羽横手を訪問したが、この出羽・秋田でも蝦夷のことばの暗さはない。

前にかいたごとく 青森・津軽・鹿角で感じたのと全く同じ。

やはり この奥州が中央とは別に大きな文化圏を持ち、それが今もそこに暮すひとたちに生きづいていてあり、よそ者の我々が抱くイメージからは程遠いのかもしれない



3. 秋田の街に製鉄遺跡を訪ねて 2003. 3. 15.

秋田大学 鉱業博物館・古代秋田城遺跡・古代製鉄地名の残る金足集落

3. 1. 秋田大学 工学資源学部 附属 鉱業博物館
3. 2. 古代中央政権の東北支配の前線基地 秋田城
3. 3. 古代製鉄関連地名 秋田市 金足集落を訪ねる

鉱物資源の宝庫秋田にあって古くから鉱物資源開発・金属材料のエンジニアを育ててきた秋田大学金属材料を志す者にとっては是非とも訪問したかった秋田大学鉱業博物館である。

また 何とはなしに蝦夷の最北の地が秋田。でも縄文から見ると日本の中心 米代川・雄物川流域にはストーンサークルはじめ多くの古代遺跡あり。

また秋田・能代の海岸に古代製鉄遺跡の印がついている。そして 古代には秋田城が置かれている。

秋田は蝦夷の時代からの産鉄の根拠地ではないか・・・???

そんな 心もとないイメージの中で



- 北上市から西へ和賀川に沿って奥羽山脈を越え米沢へ至る道は「奥州藤原氏が支配した鉱物資源の通商路 秀衡古道」その奥羽山脈の一番奥深いところか仙人峠そこから鉄が出る。相澤史郎著「奥州・秀衡古道を歩く」
- 蝦夷のリーダー「アテルイ」を描く佐藤清忠氏の「ヒタカミの鬼 一和我の里」に別項のような文章があり、次のことが生き活きと書かれているのを知った。和賀は蝦夷の主交易品 和鉄の生産基地。北上川流域の陸奥から奥羽山脈を越えて出羽に入り、日本海に面する秋田
 - ・ 津軽十三湊に至る道は蝦夷の生命線 鉄の通商路

<http://www.michinoku.ne.jp/~satok/at14.html> より

奥州藤原氏はこの蝦夷の鉄の覇権を受け継ぎ、平泉の繁栄へとつながり、古くからの蝦夷の鉱物資源・鉄の通商路を受け継ぎ それが「秀衡古道」として今に残っている。

薄ぼんやり縄文の北東北 country walk で得た秋田のイメージと 鉱物資源・蝦夷 和鉄の国「秋田」が結びつくにつれ、一度は是非秋田から出羽の山里を歩かねば東北は語れないとの感が強くなった。

私が秋田へ出かけたのは 3. 15. の早朝。 秋田行の新幹線に飛び乗った。

秋田までそのまま新幹線で行き、帰りに横手から北上線に乗って仙人峠を越えて和賀・北上へ出る計画。

福島 吾妻・安達太良連峰 蔵王連峰 そして仙台を越えて 栗駒・焼石・和賀山 盛岡から八幡平 へ

と続く奥羽山脈の峰々にはべったりと雪が付き、快晴の空に壁となって聳えている。この山の向こうが出羽・秋田。 蝦夷の本拠地である。

盛岡を越えて田沢湖線に入り、山中に入ると深い雪。よくまあ こんなところに鉄路をのばしたものだと思う。秋田・横手から北上に抜けた仙人峠越えも 福島から米沢への道も雪深いすごい道。

でも これらは いずれも 古代から受け継がれた奥州の通商路。その中心は鉄・金・銅の鉱物資源奥州の和鉄の道である。

雪が覆い被さる川筋の中腹を川筋にそって鉄路が延びている峠越。周辺が雪だけなので余計に奥羽山脈で隔てられた出羽・秋田への峠越えの道のすごさ 古代最後まで中央政権が直接支配できなかった理由が判る様な気がする。

厳しい峠道を越えて 田沢湖・角館に入ると一面銀世界であるが、明るい市街が広がり、大曲に入ると秋田県の大川 雄物川を渡ると一面雪野原の秋田平野が広がり、この雄物川にそって海岸に出ると秋田。海岸に近づくにつれ、雪が消え 秋田市周辺には雪はなし。朝 上野を出て昼前には秋田についた。

参 考 佐藤清忠氏著「ヒタカミの鬼 一和我の里一 」より 抜 粋

<http://www.michinoku.ne.jp/~satok/at14.html>

「出羽は、いかがでしたか」

アテルイもモレに尋ねた。出羽は現在の横手市の近辺である。そこにある雄勝城で、エミシの民と朝廷の間でいざこざがあったのである。

「雄勝城に帰順する者と背くものが半々というところでしょうか。いまは、出羽の租や調は、比較的軽い状況ですが、いずれ、出挙（すいこ。年利率50%で朝廷の稲を貸す制度）や、義倉（ぎそう。凶作にそなえた穀物の無尽制度）で、がんじがらめになることを心配していたようです。征服された民のさだめですが」

「背いた人たちは、その後どのように暮らしているのですか」

「帰順した人が多くおりました。しかしすぐに西方（九州地方のこと）に送られるようですね。

ええ、ご推察のように、林業と製鉄の技術指導か兵士としてです。その他は山に逃げたようですね。

子波族の地にも、多数流れたようです。和我でも受け入れました。たたら作業に就いております」

長老側近でなければ知らない情報がモレの口から紹介された。

「和我の鉄は、定評がありますからね」十三湊（とさみなと）の者が口をはさんだ。

和我の里では、「高殿たたら」による生産様式が、和我川上流（現土畑鉱山付近）に導入されており、天候に関係なく一定のペースで鉄素材を生産できたのである。モレは逆に、十三湊の者に尋ねた。

「十三湊の鉄の相場はいかがですか」

モレの関心は和我の主力交易品である鉄素材の状況である。和我の若者達も緊張した顔になる。

十三湊の者はしかし、暗い顔で答えた。

「ふむ。正直な話、下がり加減になった。越後の連中の話だが、このところ朝廷改修や造都の熱が冷め、新羅侵略を計画していた仲麻呂もいなくなった。しかし近江や出雲、越後はあいかわらず鉄を量産し続けているようなので、陸奥の鉄がだぶついたようだ」

エミシの玄関十三湊には、越後等から鉄素材や木材また塩、魚介類の仲買人の来訪者が多い。

この貿易港には、交易品の流通のみならず、村を追われた者や渡来人がたどり着き、その後、当時の禁制品であった製鉄に従事することも多かった。

アテルイは、このような者の組織化や開発、流通を行うことが本業であった。

広いコンコースのある秋田駅の二階から西側を見ると奥羽山脈を背に広がる市街地越しに南北に長く連なる低い丘陵地が見える。この丘陵地が古代 秋田の製鉄基地となったところ。

この一角の南の端の山裾に秋田大学があり、さらに北側に古代秋田城遺跡 そして 古代製鉄遺跡群ならびに製鉄関連地名群がつながる金足地区へと続いている。

案内所地図を貰ってスケジュール確認する。

秋田大学の鉱業博物館を見学して 古代秋田城へ行って 木村清幸氏の「八郎潟東岸の古代製鉄遺跡と地名」で知った金足集落まで足をのばす計画

3.1. 秋田大学 工学資源学部 付属 鉱業博物館



秋田大学 鉱業博物館 と 大学キャンパス 2003. 3. 15.



秋田駅の東側にでて 車で約 10 分 市街地を抜け 丘陵地の高台の上に鉱物博物館があり、その下には大学のキャンパス越しに市街地が見える。

是非訪づれたかった鉱業博物館。立派な建物にビックリ。確か昔は鉱山学部だったと思いますが 鉱物資源の国秋田を支える秋田大学。「工学資源学部」の名に日本の鉱物資源開発のエンジニアを育てて来た伝統と自負の意気込みを感じました。

秋田県を鉱物資源国にした奥羽山脈に延びる黒鉱脈 鉄・金をはじめ銅 亜鉛ほかそして石炭・油まで産出。数々の鉱石標本が円形の建物の中に収められていました。

兵庫県生野銀山の三菱コレクション 茨城県の自然博物館の鉱石コレクションや東北大金属博物館も立派でしたが、量・質・大きさとも勝るとも劣らない素晴らしさでした。



鉱石標本展示

鉄鉱石も明礬石など変わった鉱石も見つけました。
 標本というと大抵は 親指大の大きさなのですが、何百と並ぶ鉱石標本がいずれもこぶし大の大きさ。
 そして 鉄鉱石標本だけでも数十を越える豊富さにビックリしました。
 また 蝦夷の和鉄生産基地和賀 仙人峠から産出した鉄鉱石も見ました。



岩手県和賀郡和賀町仙人鉱山 赤鉄鉱



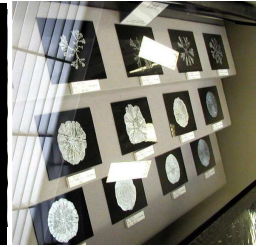
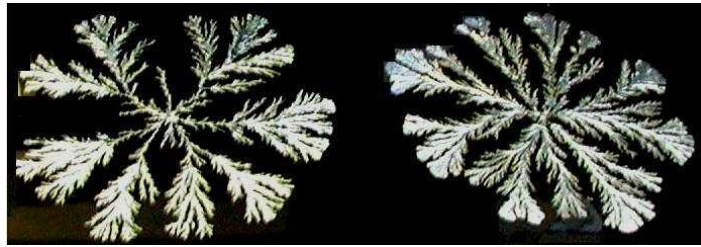
群馬県六合村 群馬鉱山 鉄明礬石

含鉄温泉の一つきれいな黄色をした温泉 明礬泉 また 赤鉄鉱を含む赤湯にも温泉はわかったけどどんな形で鉄がふくまれているのか・・・鉱石を見てみたいと思っていましたが、鉱業博物館で大きな標本に出会えて満足。

又、 雪の結晶にも似た亜鉛の成長の姿 亜鉛花の美しさも印象的でした。メッキの中にこんな技術があるなど知りませんでした。

あ えん か
 亜鉛花

亜鉛花の美しさ



残念ながら和鉄・たたら関係の展示はありませんでしたが、和賀 仙人峠の鉄鉱石を見れたのも収穫。やっぱり大したコレクションの数々 その立派さに伝統を支えてきた重みを感じました。

3.2. 古代中央政権の東北支配の前線基地 秋田城



秋田駅より北へ車で約15分八橋・泉・金砂神社などの地名を眺めながら中心部の市街地を抜けて国道を走ると左手に小高い丘が見えてくる。

ミッションスクールの所から左に折れ、丘陵地への道を登って行くと雑木林が広がる丘陵の上に出ると外郭東門とそれに連なる築地塀が復元されている国の史跡「秋田城跡」の中に入る。

この秋田城のある丘陵は高清水丘陵と呼ばれ、秋田駅より約三キロメートル北 土崎駅の南に位置し、旧雄物川と草生津川に挟まれた標高30～50メートルの丘陵地である



秋田城跡 復元された外郭東門 03.3.15.

秋田城は奈良時代から平安にわたって約3世紀にわたっておかれた日本最北端の大規模な役所で政治・軍事・文化の中心地だった。

天平5年(733)に秋田村高清水岡に造られた当初は「出羽柵」と呼ばれ、『続日本紀』733(天平5)年の条に「出羽柵遷置於秋田村高清水岡」と記されている。

やがて天平宝字8年(764)頃 秋田城と呼ばれるようになった。

その後、奈良時代には「国府」が置かれ、大陸の渤海国(中国東北部)など対北方交易の拠点としても重要な役割を果たしていたと考えられています。



秋田城跡のほぼ中央

部の地域を政庁と呼んでいるが、その大きさは東西94m 南北77mで周囲に塀をめぐらし、その中に建物が規則的に配置され、ここで重要な儀式や政務がとられた。

秋田城跡は昭和14年(1939)9月に90ヘクタールが国の史跡指定。昭和47



年(1972)から発掘調査を開始し、現在も継続中である。

秋田城 政庁跡 発掘現場

2003.3.15

3.3. 古代製鉄関連地名 秋田市 金足集落を訪ねる



木村清幸氏「八郎瀧東岸の古代製鉄遺跡と地名」の研究で秋田市周辺から八郎瀧東岸にかけて、数多くの製鉄関連地名があることを知り、その中で唯一知っていたのが「金足」の地名。

『甲子園に出てくる常連校「金足農業高校」って 秋田市の学校・・・??』

木村氏の資料にでこわして調べるまで全く知りませんでした。



秋田市 金足追分周辺

秋田城のある丘陵地から降りて、国道をさらに北へ15分 市街地を抜け、左手海岸沿いに私の仲間が溶接をしたタンクのある秋田発電所の煙突を過ぎ、男鹿半島が近づくと田園地帯が広がる秋田市の北の端が金足地区。右手には田園地帯の向こうに低い丘陵地が延々と北に伸びている。

この丘陵地を南から北へ古代のたたら集団が薪・炭を求めて移動ながら和鉄精錬を続けていった所である。

奥羽本線で秋田駅から三つ目追分駅のところで車を降りて東へ秋田歴史博物館のある林の中に入ってゆくと金足追分から金足小泉集落への道。

いきなり林の中に「金足農高」がありました。



奥羽本線 追分駅



金足地区の丘陵地と県立博物館

2003. 3. 25.

林の一本道 奈良姓の家が並ぶ家並みを過ぎると金足風致地区の標識と葎が生茂る潟か散らばる丘陵地にはいり、潟の向こうには丘陵地をバックに秋田県立博物館。残念ながら県立博物館も改装中で閉館。



丘陵地の木々の芽吹きはまだで褐色の丘陵地が続いているが 古代の和鉄製造に思いをはせながらの里歩き。

どのあたりの丘陵に生産基地があったのか・・・

秋田の蝦夷は阿倍比羅夫の征伐軍に戦闘をいどまず 従順だったという。

俘囚となった製鉄の民はどうしたろう・・・

この丘陵地のたたら衆はその流れか・・・それとも渤海 朝鮮半島からやって来た韓鍛冶か 大和の鍛冶か・・・

地図には古代製鉄関連地名と木村氏が指摘した金足・小泉・新城などの地名とともに 下刈 浦山も製鉄関連か・・・

たたら製鉄関連の遺跡そのものにはぶち当たりませんでした、本当に goo な蝦夷和鐵の道 を訪ねる秋田 walk でした。

このまま 能代まで八郎潟東岸の和鉄関連遺跡探訪も魅力ですが、やっぱり横手から北上線に乗って蝦夷のふるさと和賀へ 古代出羽から陸奥への仙人峠道を通りたい。

午後2時過ぎ 秋田新幹線・奥羽本線の乗継で横手へ



秋田の後背地 古代には蝦夷の鐵の生産基地であったろう 長く延びる丘陵地を眺めながら秋田を後にして横手へ向かった。

2003. 3. 15. 秋田から横手への汽車のなかで

5. 古代 出羽国 秋田 和鉄の道を訪ねて

北上川流域の陸奥から奥羽山脈越 出羽・秋田そして津軽十三湊へ

奥羽山脈越えの和鉄の道は蝦夷の生命線

【完】

奥州 蝦夷の心臓部を貫く和鉄の道

北上 (和賀) 仙人峠越



1. 北上山地 東の仙人峠 と 奥羽山脈 西の和賀仙人峠
2. 和賀仙人峠に古代蝦夷の鉄に思いをはせて
3. まだ雪深い早春 横手から北上線で和賀仙人を越えて北上(和賀)へ
 - 横手 walk & 北上線 和賀仙人越 —
 - 3.1. 横手 Walk
 - 3.2. 北上線 和賀仙人越

1. 北上山地 東の仙人峠 と 奥羽山脈 西の和賀仙人峠

北上市をセンターに北上川をはさんで東西の山地にある二つの仙人峠 東の「千人峠」と西の「和賀仙人」。そこは古代から奥州の製鉄の生産基地。北上川をはさんで丁度 対称の位置 東の北上山地と西の奥羽山脈を越える厳しい山越えの峠それぞれがそれぞれに「仙人峠」の名がある。

どちらも本当に山深い奥地であり、かつ 古代からの鉄資源の宝庫 最近まで鉱山があった。

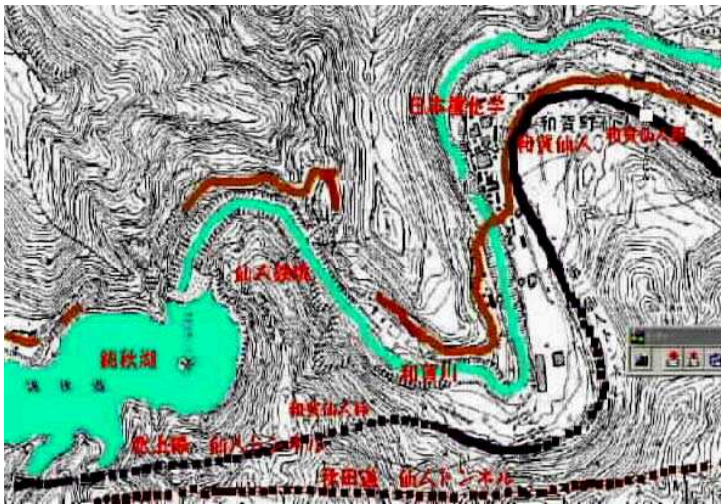
奥羽山脈と北上山地に挟まれたこの北上川流域 北上(和賀の里)・胆沢の地は蝦夷アテルイの前線基地。これより北に広がる広大な地域「奥羽」は蝦夷の勢力圏であり、ここで大和の勢力と蝦夷が対峙して幾多の攻防を繰り返した。

蝦夷の根拠地 胆沢・和賀から東へ早池峰山麓の遠野から北上山地を越えて海岸に出ると釜石。

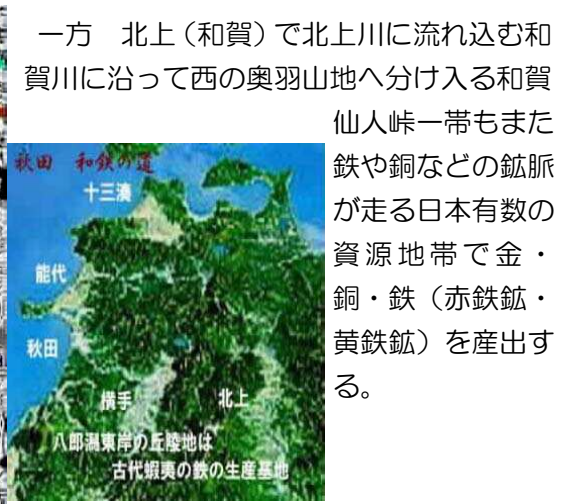
その北上山中にある仙人峠はこの地から出る鉄鉱石(磁鉄鉱)を原料とした洋式高炉が初めて作られた地。この峠近傍から流れ出る川には「餅鉄」があり、また海岸には砂鉄。

この北上山地から釜石の海岸に至る川の地域には古代からこれらを原料とした一大製鉄基地があり、幾多の製鉄伝説が残る地である。





奥羽山脈 和賀仙人周辺



一方 北上(和賀)で北上川に流れ込む和賀川に沿って西の奥羽山地へ分け入る和賀仙人峠一帯もまた鉄や銅などの鉱脈が走る日本有数の資源地帯で金・銅・鉄(赤鉄鉱・黄鉄鉱)を産出する。

和賀仙人峠の事を知ったのはつい最近。平泉で栄華を極めた奥州藤原氏の通商路「藤原秀衡古道」について書いた新書で。

奥羽山脈焼石岳と和賀岳の間から流れ出る和賀川に沿って奥羽山脈に分け入る峠道 今では北上線と秋田自動車道路が通る山中に鉄鉱山とそこに和賀仙人峠の名がつけられていた。

古代蝦夷の時代からの鉄の通商路調べれば調べるほど 面白い所である。

知っているようで知らなかった奥州・蝦夷の世界でした。

古代蝦夷の支配する「和賀」〔奥羽山中を流れ下ってきた和賀川が北上川に合流する現在の北上市周辺〕は大和との戦いの最前線「胆沢」の後方拠点。

奥羽山脈から産出される鉄をベースに武器などの製造拠点・補給基地の役割を果たしていたという。

和賀からこの奥羽山脈越の仙人峠を越えると出羽の横手へ。

そこから海岸地帯の秋田・能代と出羽の鉄の生産地をとおり蝦夷貿易の玄関口津軽・十三湊へと続く道は古代からの蝦夷の重要通商路。

この道は奥羽山脈を背にその東西の陸奥・出羽に広がる蝦夷の心臓部をつらぬき、蝦夷の最大の武器「蕨手刀」など主要交易品である「和鉄」の通商路として繁栄を極める蝦夷の生命線「蝦夷 和鉄の道」であったに違いない。

北上川をセンターに東西にある北上山地・奥羽山脈それぞれにある「仙人峠」付近は古代から現在に至るまで 鉄などの鉱物資源の宝庫。古代から「和鉄の道」が通っていたに違いない。



和賀仙人峠周辺 秀衡古道と周辺の鉱山

- 参考 ◆ 「蝦夷の鉄・餅鐵を訪ねて -北上山系 釜石・大槌町-」
- ◆ 古代 出羽国 秋田 和鉄の道を訪ねて
 - ◆ 佐藤清忠著「ヒタカミの鬼 -和我の里-」
 - ◆ PHP 文庫「秀衡古道」

2. 和賀仙人峠 に 古代蝦夷「和賀の鉄」に思いをはせて



蝦夷の刀・日本刀の原型となった「蕨手刀」 中世鎌倉時代の鍛冶加工図

この奥羽山脈の和鉄並びに鉱物資源の覇権をめぐる大和と蝦夷が対峙し、ある者は恭順を示し、また、幾多の戦闘ののち、蝦夷から大和の手にこの覇権が順次落ちてゆく。

阿倍比羅夫・坂上田村麻呂らの奥州征伐 蝦夷征伐といわれるが、その本質は蝦夷の支配する鉱物資源の覇権をめぐる「和鉄の道」での戦いだったともいえる。

中央政権の支配が強まるにつれ、 蝦夷は俘囚として中央政権に組み込まれてゆくが、蝦夷の後継者安部氏が鉄の覇権をかけて 出羽の豪族清原氏と争い（前九年の役）さらに、清原氏の内紛後三年の役を経て、奥州藤原氏がこの東北地方を治めることになる。

これらの戦いもまた 蝦夷を束ねる出羽・陸奥の豪族間の戦いと同時に奥羽山脈に眠る豊富な鉱物資源の覇権をめぐる争だったとも言われている。

これらの戦いの中で敗れた蝦夷・俘囚の出羽鍛冶・舞草鍛冶など優秀な奥州の鉄の工人が都や西国に連れてゆかれ、その後の西国での和鉄生産 日本刀に代表される鍛冶加工の発展を担って行く。

このように古代奥羽山脈の東西を結ぶ「和鉄の道」はその後 日本各地の鉄生産・鍛冶加工にかかわる重要な役割を果たしていったと考えられ、「金売り吉次」の伝説もこれらの中からうまれた。また 奥羽山脈の鉱物資源の覇権を握った奥州藤原氏は平泉を本拠として栄華を極め、平泉から奥羽山脈を越える通称路はその後も奥州の主要通商路として益々繁栄する。



平泉から北上市で和賀川にそって 奥羽山脈に分け入り、和賀仙人峠を越えて横手に至る道は後三年の役の後、奥州の蝦夷支配ならびに奥州の鉱物資源の覇権を握った奥州藤原氏の主要通商路 「秀衡古道」とよばれ、繁栄を極めた。

その後も この仙人峠付近の鉱物資源の主要通商路としてとして今に名を残している

また この仙人峠付近の鉱物資源は古くは蝦夷・平安の古代から中世・江戸時代をへて、現在にいたるまで採掘が続けられてきた。

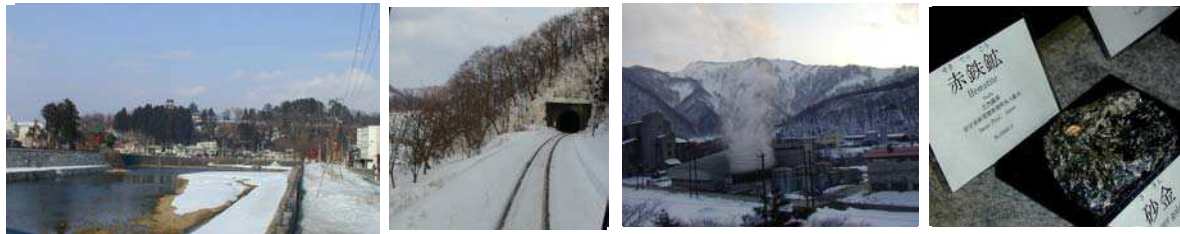
いわゆる奥羽山脈を貫く黒鉱脈ベルトに位置し、まさに日本の鉱物資源産出の役割を担って来た。そういう意味でも明治の洋式高炉が建てられた東の北上山地の仙人峠と双壁である。



黒鉄ベルト地帯が走る 仙人峠近傍と鉱山群 黒鉄脈走る奥羽山脈 和賀仙人鉱山から産出した赤鉄鉱
日本資源産出マップ 秋田大学 鉱業博物館 展示より

3. まだ雪深い早春 横手から北上線で和賀仙人を越えて北上(和賀)へ

— 横手 walk & 北上線 和賀仙人越 —



横手川と横手市 北上線 和賀仙人付近 山中のフェロアロイ工場 和賀仙人鉱山産出赤鉄鉱

昨年秋、釜石線に乗って東の仙人峠を越しましたが、今回は西の仙人峠越え
秋田へ出かけた帰りに横手から北上へ通ずる北上線に乗ってこの和賀仙人峠を越える
山の斜面に沿って、雪の壁の中を走る一筋の鉄路 よくまあ こんなところに鉄路を・・・というのが印象でした。

3.1. 横手の街で 2003. 3. 15.



横手駅前 「かまくら」の像 2003. 3. 15.

午後 秋田を出発して 秋田の大河 雄物川をちらちら見ながら 雪の秋田平野を突っ走って横手に入る。横手市に入手前の雪野原の丘陵地に「三年の役」駅。この丘陵地にかつての金沢城(金沢柵)があり 線路に沿って 後三年の役の合戦を描いた大きな立て看板が立っている。

古代 蝦夷の俘囚長となった出羽の清原氏の内紛の中、陸奥安部氏の流れくむ奥州藤原氏が勝ち、栄華を極めてゆくスタートとなった古戦場である。



【 後三年の役 と 金沢城 インターネットより 】

すっぽりと雪に被われた野原であるが、中央政権が 蝦夷支配を強めるために築いた金沢柵。そこを本拠として出羽・陸奥の俘囚長として蝦夷を支配した清原氏。出羽蝦夷の郷の真っ只中にある。そんなことを考えている間に横手の駅へ汽車はすべりこんだ。もう 雪が消えて「かまくら」のイメージはない。



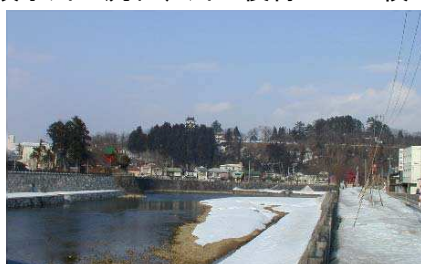
雪の秋田平野

山深い横手の待ちを訪ねるのは初めて。出来れば「かまくら」の時に訪れたかったのですが、三年ながらダメ。でも 駅前の「かまくら」の像が迎えてくれる。お目当ての奥羽山脈越えの北上線の出発まで約1時間ほど待たねばならない。



秋田平野を貫く雄物川

雪横手は 東に奥羽山脈 西に出羽山地に挟まれ中央に雄物川が流れる盆地で、通商の要衝として 古代 金沢柵が置かれ、朝廷 出羽蝦夷支配の根拠地になったところ。その後も雄物川海運の物資集散地として発展。街の中心部には雄勝川に注ぐ横手川が流れ、川の後背の丘に横手城の天守閣が見える。



横手川と横手城

また、金沢柵が置かれた場所は街の北の外れ 覆う線で通過してきた後三年の役駅の背後の丘陵地。

今回はゆけず。

の中をゆっくり歩く。



横手市の大通 2003. 3. 15.

周囲を山で囲まれた横手盆地 東側には今日越える奥羽山脈が連なり、南側には出羽山地が海岸部までばっている。 午後の太陽の明るい日ざしの中、雪国の暗さはない。駅前の商店街から一筋はいるとまだ昔の古い商店の家並みが連なり、各家々の玄関口が二重になっているのが、雪深さを思い出させる。



懐かしい看板などと一緒に二重になった玄関が並ぶ 横手市の市街

商店のガラスに「アニメ映画『アテルイ』の前売り券あります」の張り紙があちこちにある。やっぱり ここは古き蝦夷の根拠地。 蝦夷に対する親しみをこの張り紙に見ました。

後三年の役駅前には雪の中に合戦の絵のおおきな立看板がたっていたが今回は行けなかった金沢柵。出羽 蝦夷の俘囚長 清原氏の本拠。

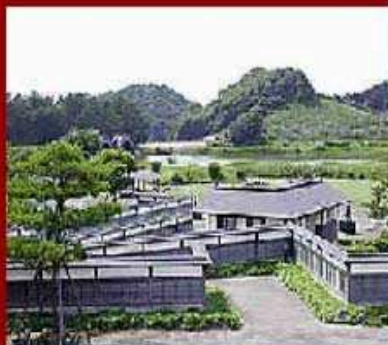
後三年の役ではここを舞台に源義家の支援を受けた奥州藤原氏が清原氏を追い詰め、清原氏は金沢城で滅亡する。 奥羽本線の後三年の役駅のすぐ前から広がる丘陵地。 今 この古戦場は「平安の風わたる公園」として整備されているが、一面の雪野原。

次回には一度金沢柵まで行ってみようと思っている。

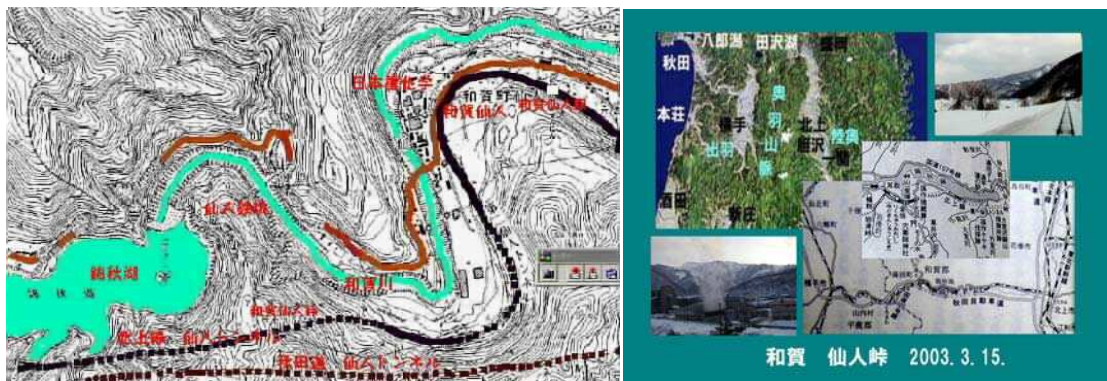
金沢柵そばの「平安の風わたる公園」

internet より採取

後三年の役の主戦場。清原直衡死後、清原一族が内紛を深めていくなか清原清衡は異夫弟の家衡に妻子を殺害され、清原一族をまっぴらつに分けた戦争に発展していく。そのおりに家衡がこもったのが、ここ、金沢柵である。天然の要塞であるこの柵に手を焼いた清原清衡と陸奥守源義家の連合軍は兵糧攻めで、この柵をおとし、後三年の役に勝利する。難攻不落の柵である。本丸付近には兜八幡神社がある。また周辺には義家が雇の列の乱れから敵方の兵が潜んでいることを見破った場所という西沼がある。この周辺は「平安の風わたる公園」として整備されており、清原清衡、清原家衡、清原武衡、源義家のブロンズ像などがある。



3.2. 北上線 で 和賀仙人峠 越



約1時間ほど街を歩いて 真っ暗になる前に仙人峠を越えることを期待して北上線4時発北上行に乗り込みました。

山形県新庄・秋田湯沢方面から秋田角館方面からか判らないが、カメラを片手に持った人がやたらに多く乗り込んできて、みんな場所取りをやっている。

そんなこの北上線の山越えの鉄道の雪景色は有名なのか・・・?? と期待が膨らむ。

街を出るとさすがに雪野原が広がり、雪の奥羽山脈の山懐へ向って汽車がはいてゆく。

横手から奥羽山中に入り、和賀岳の麓 湯田高原を通り、今はダム湖になった黒鉱ベルトの山岳地帯和賀仙人を抜け、一気に山を下り北上市に至る約1時間30分の路線。

雪の山間を約30分程で雪の中にすっぽり埋まったほっとゆだ駅。

和賀岳の麓に広がる高原の中心駅で湯田温泉郷の中心で駅舎に温泉があることから多くの方が下車する。

ここから先は奥羽山脈の鉱山地帯。

雪に埋まった山と山の狭い谷間のダム湖の縁雪壁に沿ってつけられた一筋の鉄道を汽車が進む。よくまあ こんなところに鉄道がつけられているというのが実感であるが、すばらしい雪景色が続く。



錦秋湖周辺 2003.3.15.

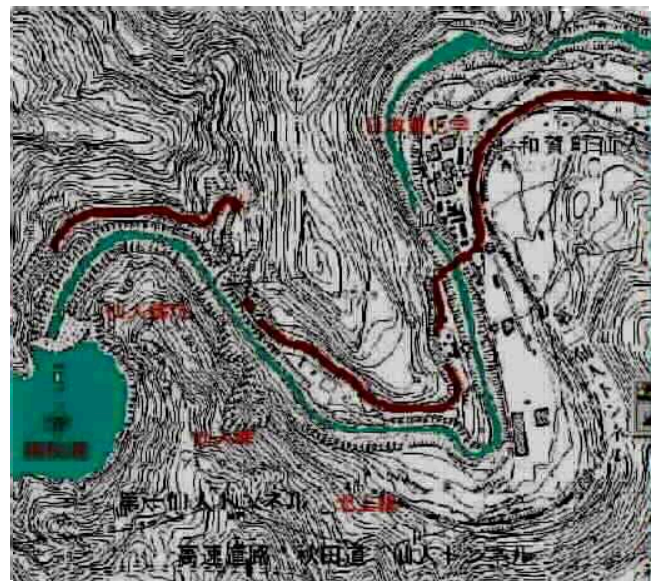
カメラ片手に先頭部に大人も子供もみんな群がって雪を掻き分け進む奥羽越えの写真を撮っている。ほどなく雪の中にすっぽり埋まった「ゆだ錦秋湖」駅。家々がすっぽり雪に埋まり、山奥の郷であることがわかる。次の駅がよいよ「和賀仙人」駅。



北上線 鉄道 和賀仙人周辺 2003. 3. 15.

汽車は雪の中を山肌にへばりつきながら いくつかのトンネルを抜けて山を登ってゆく。幾つかのトンネルを抜けた後、山中に山肌にへばり付いて建つ工場が前方に見える。今も操業している鉱山であろう。

いよいよ 和賀仙人峠周辺に至ったことをこの風景が示してくれる。幾つか山肌を巻きトンネルを抜けると四方を高い山に囲まれた山中に不意に大きな工場群が現れた。日本重化学工業・の南岩手事業所のような。



和賀仙人周辺 日本重化学工業の工場群 2003. 3. 15.

和賀仙人 山中に忽然と現れる工場群

厳しいビジネス環境にさらされているようですが、発電所等を持つ今も現役のフェロアロイの工場群である。(後で調べて判ったのですが、この工場では現在アルミ化成箔が主力で フェロアロイの工場は海外関連会社にシフトしているようだ)

かつては仙人峠周辺から産出する鉄資源を元にフェロアロイを生産し、日本の製鉄会社に供給するトップメーカーである。

日本古代から「鉄」を供給した「和賀の鉄」がこの雪深い奥羽山中仙人峠の鉄。福島県原町の行方金沢製鉄遺跡群が古代中央政権の武器庫といわれているが、対峙した蝦夷もこの和賀を中心とした奥羽山脈の山中に鉄資源とそれを加工する兵器庫を持っていた事が対抗できた所以であろう。この山の険しさが抵抗の支えになったことがうかがえる。



奥羽山脈 黒鉄鉱ベルト地帯が走る
日本資源産出マップ



和賀仙人峠山から産出した赤鉄鉱
秋田大学 鉱業博物館 展示より

その和賀仙人峠周辺が今も資源地帯の現役であることにもビックリ。

つい先程 秋田大鉱業博物館で勉強した日本の黒鉄鉱脈の優秀性 そしてその黒鉄鉱脈が貫く奥羽山脈と秋田の鉱物資源にも思いをめぐらした。

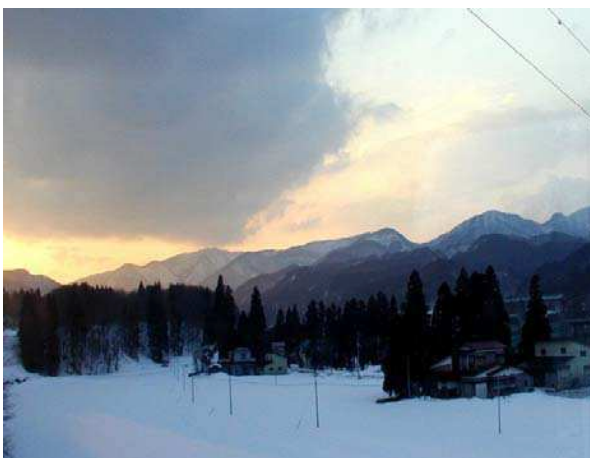
仙人峠を越えて和賀の平野部に汽車が入ると、そこは 古代 蝦夷の本拠地 和賀。雪原の背には和賀川越しに今越えてきた奥羽山脈の峰々が夕日に染まって本当にすばらしい景色。



和賀川越しに仙人峠を望む北上市より 2003. 3. 15.

古代蝦夷の時代も同じ風景があったろう。自分は東北人ではないが、東北の人達が愛する蝦夷のリーダー「アテルイ」。そして蝦夷の人達への仲間意識

そんな中に 自分も入ったような気分で覆う山脈に沈む夕日に見とれていました。横手から約1.5時間。北上駅に到着したときには 外はもう真っ暗になっていました。



北上線の車窓より
奥羽山脈に沈む夕日を眺めながら

2003. 3. 15. M. Nakanishi

奥州 蝦夷の心臓部を貫く和鉄の道
-北上(和賀)仙人峠越-

2003. 3. 15.

【完】

「弘前ねぶた」と岩木山北山麓「鬼伝説の里」

「鬼沢・鬼神社」・「十腰内・巖鬼神社」

2000. 8. 3-4 onisawaprint.htm by M. Nakanishi

【鬼沢のねぶた】



【岩木山 赤倉口】



8月東北は祭の季節。

弘前ねぶたと秋田・大湯のストーンサークルに接したくて、8月3.4日の休みを利用して日朝早く東北へ飛出した。今回津軽 walking の目的は古代の製鉄地帯であり、ねぶたの発祥の地でもある岩木山山麓弘前・五所川原のねぶたを見て、古代製鉄のエネルギーをねぶたに感じることを目的。

赤坂先生編集の「東北学2」に鬼沢・鬼神社の祭礼のきれいな写真が紹介されているのを発見。ねぶたを見て、岩木山北山麓の古代津軽の大製鉄地帯に伝わる鬼伝説と関係する鬼神社・巖鬼神社を訪ねる予定を組んで出かけた。

2000. 8. 3, M. Nakanishi 訪問記

【 内 容 】

1. 「弘前ねぶた」
2. 「鬼沢のねぶた」出陣へ
3. 岩木山の鬼伝説
4. 鬼神社 巖鬼山神社を訪ねて

8.1. 弘前ねぶた



8月3日夕方 盛岡-弘前の高速バスで弘前に到着。駅には「弘前ねぶた」が飾られ、観光客を迎えてくれるが、もっと混雑を想像していたが、予想外。

むしろ青森「ねぶた」観光列車が出たり、駅員はそのPRに忙しい。もっとも、五所川原・弘前とも「ねぶた」で宿をとるのはむづかしい。やっと弘前公園の近所の街中の旅館に宿が取れた。

五所川原の「ねぶた」は高さのあるおおきな「立ちねぶた」として有名でひそかに見ることに期待していたが、今日は前夜祭で火は入るものの運行なしとのこと。ゆっくり弘前のねぶたを見ることにした。



午後7時夕闇せまる弘前城のお堀端から運行がはじまった。例の「ねぶた」の囃子とともに扇型のねぶたが一斉に動き出した。

巨大な太鼓の上にも打ち手がまたがり、太鼓の上下から打ちたたき凄い音とリズムをだしている。

津軽じょっぱり太鼓というそうだが、この強烈な音とリズムを伴走に中国三国志等の絵が描かれた「ねぶた」が多次から次と繰り出される。

その数50を越える連。ねぶたの総数優に100を越える。



弘前ねぶた

弘前の「ねぶた」は扇形で、一つの連では、小さなねぶたを先頭に大小幾つものねぶたを出し、一番最後に大きなねぶたと大きな太鼓とその打ち手を先頭にした囃子方が続く。

それらのねぶたの大きさに応じて その引き手・担ぎ手も小さな子供達から大人まで、いろんな年齢の人が一つの連を組み行進する。

このねぶたの共同運行に参加することを「出陣」という。街や集落のあちこちに「出陣」の登りがひるがえり、それぞれの街が、「ねぶた」を出していることをほこっている。

日が落ち暗くなると引き手や周りの建物の影が消え、囃子の主役である太鼓とねぶただけが浮かび上がり、太鼓を中心とした囃子に乗って、時々「トウリヤートリヤ」の声が掛けられる。また、表には三国志等を題材にしたねぶた絵が描かれ、裏面には美人画が描かれる。このコントラストもおもしろい。この表・裏面の絵を見せる為、この扇型の部分を引き手が回転させると見物している人達からパチパ



と拍手がおきる。青森ねぶたのあの「ハネコ」はいないが、太鼓のリズムは強烈だし、都会では消えた津軽の街のエネルギーを感じると同時に実に美しく楽しい祭である。また、弘前の街の性格から来るのか良く判らないが、殆どの連が地域・地区の連で、他の観光化した祭に見られる企業の連とそのPRの連は少なく、絵もほぼ伝統のねぶた絵にまとめられており、手作り・地域の人みんな楽しんでいているといった風が色濃く守られている。例えば幼稚園のグループが沢山出陣

していたが、小さなねぶたに子供達の今のキャラクタがまじっているが、ほほえましく全く違和感がない。



次から次と連がくりだし、横丁を歩くと運行に参加するねぶたが順番待ちであふれている。少し離れて町をみると祭りのさなかであるが、どこも普通にいつもとかわらずと言った風。街も人も特別な風ではなく、みんな楽しみで仕事を終え、ねぶたに参加するため、三々五々集まっている。そうではないと1-7日まで7日間もつづかない。

また この祭はどこかの神社の祭礼といったものでなく、みんなで夏を楽しんでいる。後で知ったのであるが、街の中心部だけでなく近郷の集落もみなそれらの集落で準備し、この弘前の街の中心の運行に参加すると言う。

運行の丁度真中あたりで、明日出かける「鬼沢」集落の連が「鬼伝説の里・ねぶた」として登場。びっくりした。地図で言うともう弘前の外れ、街から岩木山の麓を鱈ヶ沢の方へ車で約30分のはず。随分遠く離れているのに。

後でわかったのだが、鬼沢の里は今も「鬼」を大事にするおおきな集落であった。

観光化せず、周りの集落も含め、老いも若者もそして子供たちもみんな、年に一回、弘前の街の中心にあつまって楽しむ手作りの祭 それが「弘前ねぶた」。

都会では消え去った地域のつながりを強く感じました。

8.2. 「鬼沢ねぶた」出陣



丁度運行の真中あたり、「鬼伝説の里 鬼沢」と浮かびあからせねぶたを先頭に「鬼沢ねぶた」の連がやって来た。大きな連である。

私の頭の中では、何の根拠もなく、津軽のエネルギーを「ねぶた」と「たたら・鬼伝説等古代からの文化」とをだぶらせて考えていたが、ストレートに「鬼沢の集落が鬼伝説の里として」ねぶたの運行に加わっている事に意外で少なからず感動した。



鬼沢は弘前の街から西へ鬼が住むと昔から伝えられる岩木山北山麓の赤倉山麓を鱒ヶ沢へ続く一本道を車で約30分。古代の集落遺跡や古代の大製鉄地帯の端にあり、次の鬼伝説があり、さらに4,5扣進むと弘前市の端「十腰内」。

この十腰内から鱒ヶ沢にかけては既に紹介した古代たたら遺跡が残る古代たたら中心地であり、古代遺跡ばかりでなく、有名な鬼伝説「鬼太夫伝説」や地名に古代たたら製鉄の基地としての痕跡を色濃く残している。

8.3. 岩木山の「鬼伝説」

【岩木山北山麓赤倉側 古代製鉄地帯の鬼伝説】

1. 鬼沢の「鬼伝説」

**** 津軽 岩木山麓 鬼沢に伝わる「鬼伝説」 ****

青森県 弘前市 鬼沢

昔々このあたりはやせた荒地で、作物の実りはきわめて悪かった。

そこへ、岩木山の赤倉から下りてきたという鬼が現れ、せっせとこの荒地を耕し始めた。

村人達は、これを見て、ただの鬼ではないと思い、開墾の困難と農業用水の必要を 鬼に訴えた。すると鬼は、それでは力を貸そうと言ったきり、姿を消してしまった。

翌朝になって村人たちが行ってみると荒地には、一筋の水の流れが勢いよくほとばしっているではないか。

村人たちは、さっそくその水を田に引き、以後、その水は干ばつの時も決して枯れることはなかったという。

村人たちは、非常に喜んで、鬼に感謝するため、神社を建立して「鬼神社」と名づけ、村の名前も「鬼沢」としたという

節分に豆をまかないという

2. 鬼神太夫伝説

***** 岩木山北山麓の「鬼太夫」伝説 *****

鱒ヶ沢町 湯舟 湯舟神社 弘前市 十腰内 巖鬼神社

昔 鬼神太夫(赤倉山の鬼とする話もあり)と呼ぶ剛力の刀鍛冶がいました。桂山の刀鍛冶長者の娘を愛して娘をくれるようにと申し込んだ。困った長者は一策を案じ、一晩の内に拾腰(本)の刀を鍛えたら娘をやると約束した。

すると、鬼神太夫は一晩の内に、全部刀を鍛えて持ってきたが、長者が一本盗んで 鳴沢川 に捨ててしまった。

それで、鬼太夫は刀が一本足りず、娘を貰えずあきらめて、「十腰無い 十腰無い」とつぶやきながら、さびしく去っていった。

それで、それ以後この地を「十腰無い」がなまって「十腰内」というようになった。また、残った九本の刀は巖鬼神社に納められた。

その後、鬼長者の妹娘と結婚した鬼神太夫の弟が、ある日のこと鍛冶場の片隅に残っていた玉鋼明け、その玉鋼を氏神として八幡様に祭った。は今もこの玉鋼だという。

)をやり、分家させた。

が湯舟村 金敷村の起こりとなった。

いた所を「浮太刀」と言うようになった。今の「浮田」である。

なお、このような鬼太夫伝説はほかにも日本各地にあり、鍛冶屋などが、実在の名刀 工などに鬼神の名をつけた伝説を作り広げたとされている。

8.4. 赤倉山山麓に鬼神社・巖鬼山神社を訪ねて



岩木山北山麓のリング畑



鬼沢・鬼神社



十腰内 巖鬼山神社



赤倉口近傍 岩木山

1. 十腰内 鬼の総元締 巖鬼山神社
2. 鬼伝説の里 鬼沢&鬼神社

8月4日の早朝 弘前から鱒ヶ沢まで、岩木山北山麓に広がる赤倉側のに残る鬼伝説を訪ねるため、バスターミナルへ行った。予想していたとは言え、「一番奥の巖鬼山神社のある十腰内を通る鱒ヶ沢行 次は2時間後。鬼沢までは、約1時間後にある」との返事。

まあ、「岩木山山裾 鱒ヶ沢への1本道。何本かバスがあるかも」の淡い望みはダメでした。「バスだと約1時間。タクシーで約30分。」の話をたよりにタクシーにする。

タクシーの運転手氏に「岩木山の赤倉の集落を通して 一番奥の十腰内の巖鬼山神社に行き、引き返して鬼沢の鬼神社でおろしてほしい」と目的を伝えると「まあ 物好きな」と笑いながら「それでも 1年に数組 同じように鬼伝説やたたら製鉄遺跡を訪ねて、この赤倉側から鱒ヶ沢まで案内する」と。

岩木山北山麓は古代から開けた土地。この地では、岩木山の峰の一つで昔から鬼が集団で住んでいるといわれる巖鬼山(赤倉山とも言う)がその急峻な山裾を津軽半島にむかって伸ばしている。

そして、昔からこの赤倉山側の山裾から巖鬼山を通して頂上への険しい道が通じ、その入り口近傍の十腰内の山合の地に岩木山神社の元宮である巖鬼山神社がある。

岩木山神社のある百沢口が開かれるまではこの赤倉側の道が岩木山への本道で、古代より広く人々の信仰を集めている。

このあたり幾筋も伸びる沢筋からは古代から製鉄がおこなわれ、鉄滓や製鉄炉跡等が発見され、この地が古代津軽の一大製鉄地帯であることが判って来た。

その中で、十腰内から山裾の沢筋をすこし鱒ヶ沢の方に下った鱒ヶ沢町湯舟は十腰内や巖鬼山神社と共に、鬼神太夫の伝説の中心地である。

また数々の製鉄遺跡も発見されている。

鉄滓や羽口とともに100を越える製鉄炉や木炭炉の跡等が発見された空沢遺跡はここにある。

参 考 津軽岩木山北麓の古代津軽の大製鉄地帯と鬼伝説

う鬼伝説の里「鬼沢」は十腰内から3つほど集落を弘前の方へ戻ったところ。この鬼をまつる鬼神社は巖鬼神社を本社とする末社。

このように岩木山北山麓赤倉側の山合には、鬼伝説が広くつたわり、古代から渡来した産鉄の民が鉄の王国を築き、大和勢力と対峙する蝦夷の本拠地であったと推定されるが、まだ確たる証拠はない。

1. 十腰内 鬼の総元締 巖鬼山神社



弘前から街を出て、岩木川を渡り、岩木山山麓にさしかかるあたりからは、一面のリンゴ畑。リンゴの実をつけているもののまだ、青く熟した真っ赤な実になるには数ヶ月かかるだろう。リンゴ畑の一本道を走るが、岩木山は霧の中で全くみえず。出発して 15 分ばかりすぎると岩木山の外周道路にでて、山壁が見えるほどに山が近くなる。赤倉の集落である。岩木山の輪郭が霧の中に薄っすらと見え、霧で埋まった幾筋もの谷筋・沢筋がみえ、いよいよ山の中に入ってきた。赤倉から 10 分ほどさらに走り、鱒ヶ沢への道と別れ、巖鬼山神社への別れを山の中へと原生林の中に入っていくと谷筋の出口に巖鬼山神社が立っていた。



巖鬼山神社の中は鬱蒼とした谷間の森で、小さな社殿の横には千年を越える杉の巨大樹が天空にそびえ、古代から鬼伝説の世界をずっと眺めてきたに違いない。本殿のすぐ西側の沢筋には、「龍神」がまつられている。深い樹木につつまれたこの沢筋からは一筋のきれいな水が流れおち、龍神とが重なり、産鉄の民が古くからこの谷筋でも、「製鉄をやっていたのでは?」と思えるような沢すじ。おそらく境内の 2 本の杉の巨大樹はそれをじっと見てきたのでは・・・と想像を膨らましている。

誰もいない鬱蒼とした原生林の中にひっそりと「巖鬼山神社」がありました。
でも「鬼の総元締の神社にしては明るい」と感じました。



千年杉の巨木 原生林につつまれた本殿 千年杉と本殿 本殿そば龍神を祭る沢筋

巖鬼山神社の中は鬱蒼とした谷間の森で、小さな社殿の横には千年を越える杉の巨大樹が天空にそびえ、古代から鬼伝説の世界をずっと眺めてきたに違いない。

本殿のすぐ西側の沢筋には、「龍神」がまつられている。深い樹木につつまれたこの沢筋からは一筋のきれいな水が流れおち、龍神とが重なり、産鉄の民が古くからこの谷筋でも、「製鉄をやっていたのでは?」と思えるような沢すじ。おそらく境内の2本の杉の巨大樹はそれをじっと見てきたのでは・・・と想像を膨らましている。

誰もいない鬱蒼とした原生林の中にひっそりと「巖鬼山神社」がありました。
でも「鬼の総元締の神社にしては明るい」と感じました。

2000.8.4, M.Nakanishi 訪問記

2. 「鬼伝説の里」 鬼 沢 と 鬼 神 社

待たせたタクシーに乗って巖鬼山神社から約 10 数分。弘前の方へ引き返す。来るときに通った道から一筋北側のバス道を2,3の集落の家並をすぎると大きな明るい集落に入った。

山裾の村というより、大都会弘前のベッドタウンといった感じの前後を沢筋で区切られた明るい丘陵。それが鬼沢であった。もっと暗い山合の小さな集落をイメージしていたが、まったく異なる。これだけ大きければ、昨日の大きな鬼沢地区ねぶたの出陣もうなずける。

鬼伝説の鬼神社は、こんな街中の小さな森の中にひっそりありました。

「鬼が灌漑用に堰を築いて水不足をすくってくれた鬼沢」の伝説によって、いまでも地域が一つにまとめられる鬼沢といったイメージを昨日の鬼沢のねぶたと重ねています。



鬼神社鳥居 鬼伝説の里 「鬼 沢」の集落 弘前市鬼沢 鬼神社社殿



【鬼神社 社殿正面に掲げられた農機具の献額】

鬼を祭る鬼神社の本殿の軒下には本殿正面も含め、ぐるりと幾つもの鉄製の農機具が献額として奉納されていました。

鉄の農機具を使って一夜にして、堰をきず[°]いて村の人たちを救った鬼の伝説からすれば、鉄の農機具は鬼つまり、産鉄の民の象徴といえます。

また「たたら[°]の民」と農民との深い結びつきを現わしているとも言えると考えます。

赤坂憲雄氏編集の「東北学 vol. 2」には内藤正敏氏の「赤倉山の鬼神 津軽・鬼神社民俗誌」が収められ、鬼神社や巖鬼山神社などに伝わる貴重な民俗を整理している。

鬼神社では、鉄製の古い農機具がご神体として奉られている事や古くからの神事と鬼伝説との関係やこの地帯の製鉄と鬼や鬼伝説との関わり等が整理されている。

鬼神社の神事の中で、この農機具が吉凶を占うきわめて重要な役割を果たしている事がしめされており、長年にわたり、多くの農機具が献額として奉納されるのもうなずれる。



【鬼神社の神事 & 獅子舞】赤坂憲雄編「東北学 2」より

津軽岩木山北山麓の古代製鉄の地を歩いてみて、もっと山奥まで立ち入り、もっと暗いイメージがついてまわると想像していたが、「鬼沢ねぶた」といい、鬼神社と鬼沢の集落といい、十腰内から鱒ヶ沢に連なる製鉄の村村いずれも想像とは別の明るいものでした。案内してくれたタクシー運転手氏いわく「良い鬼の伝説の地」が象徴的でした。

2000. 8. 4, M. Nakanishi 訪問記

「弘前ねぶた」と岩木山北山麓「鬼伝説の里」
「鬼沢・鬼神社」・「十腰内・巖鬼神社」

〔完〕

岩木山北山麓の製鉄遺跡群と鬼伝説

tgruoni.htm by M.Nakanishi 2000.3.5.

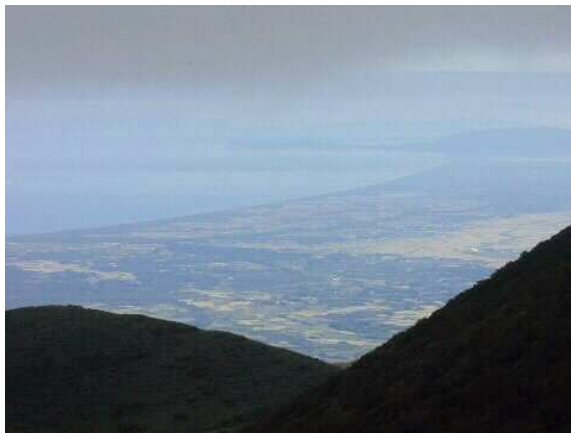
古代津軽蝦夷の大王国
縄文から続く古代製鉄のコンビナート
湯船 杓沢製鉄遺跡

岩木山北山麓の製鉄遺跡群と鬼伝説

- 鉄製農具を祭る鬼沢神社と鬼伝説
弘前市 鬼沢
- 杓沢製鉄遺跡と鬼神太夫伝説
鱈ヶ沢町 湯船

岩木山北山麓の古代製鉄遺跡群と鬼伝説
津軽の古代王国

1. 鬼伝説と古代製鉄
2. 岩木山北麓 鬼沢 「鬼神社」と「鬼伝説」
3. 杓沢製鉄遺跡群 鱈ヶ沢町湯船 と「鬼伝説」
4. 中世の交易都市 安東氏の拠点 十三湊



【岩木山から津軽半島から北海道を望む】 【北海道側から十三湖・七里長浜・岩木山を望む】

岩木山の頂上から 北を見ると眼下に、点々池・湿地が広がる広大な津軽平野「北のまほろば津軽の王国」が望める。北山麓には鬼伝説をもつ古代一大製鉄基地 鱈ヶ沢から弘前の幾多の沢筋がひろがっている。その向こうには、広々と開けた平野部が広がり、数々の縄文遺跡がある森田村そして五所川原・弘前・青森の市街の東西のベルトが伸び、陸奥湾を望む青森のはずれには、縄文の巨大都市山内丸山縄文遺跡が見える。

その奥の津軽半島に目を転じると日本海にそってまっすぐに北に伸びた砂鉄の浜『七里長浜』が見える。その海岸の湿地帯・池塘群の丘には亀ヶ岡縄文文化と呼ばれる縄文遺跡がちらばり、その奥には中世安東氏の繁栄を支えた貿易港 十三湖・十三湊が見え、竜飛岬を隔てて北海道 かつてのオホーツクの王国の地が見える。

津軽へ初めて行ってくもう 30 数年経つが、何時行っても新しい発見の有る津軽。

原色と太い線で描かれるあの躍動感あふれるねぶた絵とねぶたのリズム 津軽三味線の響き 恐山

のイタコ。そして、地吹雪までも観光資源としてしまう。古代からの津軽王国の歴史が今も続く活力のある地域である。

津軽へ初めて行って もう 30 数年経つが、何時行っても新しい発見の有る津軽。しかし、日本書紀によれば、この津軽の蝦夷と大和朝廷軍とは戦闘を交えたというよりも、和睦によって、大和朝廷の支配下にはいったものであると言われる。

独自の文化をもった勢力圏 津軽王国が弥生時代～中世までずっと独立性を保って存在してきたという。

弥生時代後半から 6,7 世紀にかけて、大陸・朝鮮半島からやって来た渡来人技術集団によって伝来した鉄器・製鉄技法が日本で活発に取り入れられ、製鉄も行われるようになり、それらを手に入れた各地の王国 文化圏が日本統一をめざして覇を競い、その中から大和朝廷・日本が誕生した。

そして日本の大半を統一し、東国毛野・常陸国まで進出してきた大和朝廷は 8～9 世紀初には、東北部蝦夷征伐に乗りだし、大量の鉄製武器が動員された。

既に紹介した福島県原町に存在する製鉄遺跡群はまさに大和朝廷蝦夷征伐の兵器庫として隆盛を極めた大製鉄遺跡である。また、畿内河内の古市台地の製鉄遺跡群をはじめ、京都府丹後半島弥栄町の製鉄遺跡群 吉備・出雲・そして伯耆など中国山脈各地や九頭竜川流域の越の国など日本各地の製鉄遺跡群もこの時代隆盛のひとつのピークを迎える。

大陸からつながってきた『鉄の道・Iron Road』が日本誕生を演出した流れである。

話を津軽に戻すと『鉄の道・Iron Road』は古来早くから、日本海 海路 津軽にもつながっており、日本列島の北の端で大きな独自文化圏を築いてきた。ただ、日本・大和朝廷の敵方勢力圏から外れていた為、北海道と同様 未開の土地と切り捨てられていたにすぎない。

事実 岩木山北山麓が古代の大製鉄地帯であったことが その地帯に伝わる鬼伝説と多くの製鉄遺跡群によって判ってきている。



津軽 鬼の故郷 岩木山と岩木山神社

この製鉄遺跡から発掘される炉の構造が、この時代大和朝廷の支配下にあった製鉄遺跡の炉とは少し異なっており、伝播の道が少し違っていると言われている。また、柴田弘武氏らの本によるとこれら鉄の技術を持った東北の集団がその後の時代に俘囚として、日本各地でたたら製鉄に従事し、たたら製鉄の伝播に大きな役割をはたしたことが示されている。当時 奥州・津軽の製鉄技術の優秀性が大和朝廷でも認められており、完全に津軽を征服しなかったことと合わせるとあまりきっちりとした証拠は見えていないが、津軽に巨大な鉄の王国があった。証拠であろう。

昨年秋、津軽を訪問し、岩木山に登り、縄文文化の花開いた津軽半島西海岸を歩き、鉄の痕跡を探した時にはその痕跡は見つけられなかった。しかし、山内丸山遺跡・亀ヶ岡縄文文化のスケールにふれ、また、「ねぶた」のあの山車の迫力、そして 現代の青森の明るさとエネルギーに圧倒され、ここにも古

代日本誕生にかかわった「Iron Road」が伸びていると想像していた。

岩木山の北麓一体が古代の大製鉄遺跡群であり、また、製鉄と関係深い「鬼伝説」の伝わる土地であることを知ったのはつい最近であり、いつも津軽王国の存在を意識していたものの、製鉄遺跡の存在を知り、また、じっくりと岩木山麓を歩いたことと合わせ、やっと津軽 鉄の王国『津軽鉄の道・Iron Road』の存在が実感として結びついた。

雪が消え、暖かい花の季節には、是非 この岩木山北麓に広がる古代製鉄の地を訪ねたい。



岩木山から岩木山北麓にかけての一带では、多くの鬼伝説が伝承されており、同時に古代の大製鉄遺跡群や鉄滓が数多く発見されている。鬼伝説と古代製鉄遺跡との関わり合いは日本各地で見られ、鬼伝説の有る所 かならずや古代製鉄と何らかのつながりがあったことが、製鉄遺跡や鉄滓の発掘や地名等から判って来た。吉備の桃太郎伝説 丹後の大江山鬼伝説 伯耆の国大山山麓溝口の鬼伝説 北上山地地・一関の鬼伝説 そして津軽岩木山北山麓の鬼伝説などいずれも古代製鉄の技術を持って渡来した産鉄の民との関わりが深い。

この伝説に登場する「鬼」とはいったい誰か？。

製鉄の民が真っ赤な顔をして、髪を振り乱しながら鉄を打っている様子が鬼と映ったのかもしれない。製鉄には鉄を精錬するための炉の場所として、風が吹きあがる谷間や山すそが必須であり、大量の炭の必要から森林の伐採が必要で、製鉄炉が築かれると山が丸裸になってしまう。鉄生産に付随した森林の大量伐採と 砂鉄・鉄鉱石採取のための山を切り崩しと川流し等による山の荒廃により起こる自然災害により、農耕の民との争いもたえなかつたと想像される。山深く入った産鉄の民は山と里人との争いを通して 山の民=「鬼」 悪者として描かれるこ

とが多い。しかし、時には里に下りてきたこの産鉄の民が開墾を促進し「開拓の祖」と善者にもなった。これらが鬼伝説として、また 地名として今に伝えられている。

一昨年 大ヒットした映画「もののけ姫」の記憶は新しい。

また、各地に残る大男「ダイダラボッチ・ダイダラ坊」の伝説や「河童」伝説も産鉄の民・渡来人との関わりがあるとの説があるが、よく判らない。

9.2. 岩木山北麓 鬼沢「鬼神社」と「鬼伝説」 弘前市 鬼沢



鬼神社 社殿 多数の農耕具献額を掲げた鬼神社正面 農耕具の献額

弘前市から岩木山を左手に見ながら鱒ヶ沢町に向かう県道を行くと「鬼沢」という地名が見えてきます。この集落には、「鬼神社」があり、鬼が御神体として祀られ、農業の守護神として地域の人々の信仰を集めています。この地の鬼神社には、『山から下りてきた鬼が、一夜にして荒地に一大水路を作り上げ、農耕の民の開墾を助けた』との鬼伝説が伝わっています。2月の節分、この地域の人たちは今も「鬼は内、福は内」と言い、鬼を悪者ではなく、自分達の守護神として祭っている。

鬼神社のご神体は鉄滓を数個積上げたもので、古くから石の仏様として大事に祭られてきたという。

また、神社拝殿正面の頭上には奉納額が並んでいるが、それら全部が全部、農耕具だというのが非常におもしろい。

このように鬼沢神社はこの地が古くからの製鉄地帯である事を含め、鉄との関わりが非常に深く、これがまた、『鬼伝説』とも結びついている。

岩木山にいた沢山の鬼たちが山麓に流れ出る赤倉川の流域に移り住み、この鬼沢の鬼もこの赤沢の鬼が下りてきたといわれている。岩木山から赤倉に下って行く途中には 今も「鬼の土俵」などの地名が残っている。

赤倉の山にいた製鉄の民が真っ赤な顔をして、髪を振り乱しながら鉄を打ち、農具を作っている様子が、村人には鬼と映ったのかもしれない。

津軽 岩木山麓 鬼沢に伝わる「鬼伝説」

青森県 弘前市 鬼沢

昔々このあたりはやせた荒地で、作物の実はきわめて悪かった。そこへ、岩木山の赤倉から下りてきたという鬼が現れ、せつせとこの荒地を耕し始めた。村人達は、これを見て、ただの鬼ではないと思ひ、開墾の困難と農業用水の必要を鬼に訴えた。

すると鬼は、それでは力を貸そうと言ったきり、姿を消してしまった。翌朝になって村人たちが行ってみると荒地には、一筋の水の流れが勢いよくほとばしっているではないか。

村人たちは、さっそくその水を田に引き、以後、その水は干ばつの時も決して枯れることはなかったという。

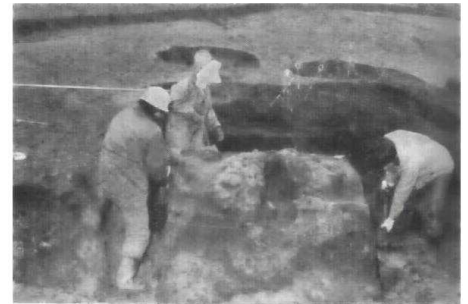
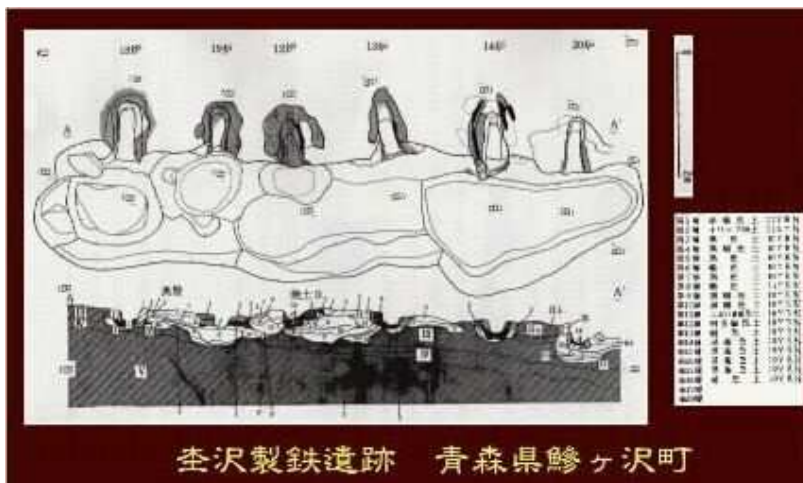
村人たちは、非常に喜んで、鬼に感謝するため、神社を建立して「鬼神社」と名づけ、村の名前も「鬼沢」としたという

9.3. 空沢製鉄遺跡群 鱒ヶ沢町湯舟 と「鬼伝説」



青森県鱒ヶ沢町から南に広がる岩木山北山麓の一帯は鬼神伝説を持つ古代から続く一大製鉄地帯の中に、鱒ヶ沢湯舟で発見された空沢製鉄遺跡がある。

数基単位で整然と並んだ製鉄炉跡 134 基とともに鉄滓・羽口や炭焼がまなどが発見された。



鱒ヶ沢町湯舟空沢の製鉄炉のきりとり作業 (鱒ヶ沢町中央公民館提供)

【青森県鱒ヶ沢町 教育委員会 資料より】

傾斜地の斜面に長さ 1m 前後 幅 50cm 弱 高さ 30cm 程度の製鉄炉が数基ずつ整然と並び、その前にそれらの前庭部には共用される廃滓ピットと作業場がある。

このような一連の製鉄炉をもつ製鉄場が 9 群 total 30 数基の製鉄炉などが発掘されている。

大半が、10 世紀平安時代の製鉄炉遺跡であるが、このような小型の製鉄炉が整然と並ぶ製鉄場を基本とする製鉄遺跡は、同時代日本中央に見られる製鉄遺跡にはない独自の形式を有する遺跡である。

また この一帯は縄文時代から続く製鉄地帯であり、数々の縄文遺跡もあり、本遺跡も古い製鉄遺跡の上に築かれていることから、この地での製鉄はもっと時代を遡れるといわれている。

このように独自の形式を持つ製鉄遺跡が発見されたことからこの地が古くからの津軽蝦夷の王国を支えた一大製鉄基地と考えられる。

湯舟の鬼神太夫伝説

鱒ヶ沢町



湯舟 中央の杉木立の上にお宮がある

湯舟 湯舟神社

昔 鬼神太夫(鬼)と呼ぶ剛力の刀鍛冶がいました。桂山の刀鍛冶長者の娘を愛して、娘をくれるようにと申し込んだ。困った長者は一策を案じ、一晩の内に拾腰(本)の刀を鍛えたら娘をやると約束した。

すると、鬼神太夫は一晩の内に、全部刀を鍛えて持ってきたが、長者が一本盗んで鳴沢川に捨ててしまった。

それで、鬼太夫は刀が一本足りず、娘を貰えずあきらめて、「十腰無い十腰無い」とつぶやきながら、さびしく去っていった。

それで、それ以後この地を「十腰無い」がなまって「十腰内」というようになった。

その後、鬼長者の妹娘と結婚した鬼神太夫の弟が、ある日のこと 鍛冶場の片隅に残っていた玉鋼を見つけ、刀鍛冶の兄が打ったものであると打ち明け、その玉鋼を氏神として八幡様に祭った。

長者が亡くなる時姉娘には 形見として 湯舟(鉄を冷やす水を入れた船)をやり、分家させた。

また、妹娘には金敷(鉄を打つ台)をくれた。それが湯舟村 金敷村の起こりとなった。

また、長者が刀を捨てた刀が浮いた所を「浮太刀」と言うようになった。今の「浮田」である。

なお、鬼神太夫の打った刀の一本が今も岩木山 巖鬼神社に祭られているという。

「ふるさと あじがさわ」より

空沢製鉄遺跡の特徴

中央と違う炉の型 高い生産力をしめす

平安時代の製鉄コンビナートが八日までに岩木山ろく、西津軽郡鰐ヶ沢町湯舟の空沢（もくざわ）遺跡で見つかった。付近には製鉄・鍛冶（かじ）の遺構のほか、鉄にちなんだ伝説、地名が多い。今回の発見は、岩木山ろく一帯が当時、「蝦夷（えみし）の地」だったとされる東北北部の鉄生産の「拠点」の一つで、北日本の鉄製品の供給源だった可能性を強く示している。

発掘調査に当たった歴史文化財調査センターによると、製鉄炉、木炭窯、鍛冶場、住居、それに丹戸の跡といった「製鉄工場」と工人たちの生活の場がまとまって出土したのは、県内では初めて。二十三基前後の炉跡はコンクリートの斜面の土を掘り出してつくられていた。

今回発掘された製鉄工場遺跡の範囲は、東西約三十メートル、南北約百二十メートル。南側に製鉄炉群が六列並び、さらに燃料を生産する木炭窯跡が三基あった。北側には、十九棟の住居と三基の鍛冶場を配置。製鉄炉群の斜面の上方には相い構、住居部分の南方には幅三メートルの大きな溝が走っていた。相い溝は製鉄炉への水の侵入を防ぐためのもの、大きい溝は防衛用だった可能性がある、としている。

多い製鉄や鍛冶の遺構

一地名も伝説も鉄づくめ——岩木山ろく一帯

製鉄史の研究をしている「たたら研究会」（本部・広島大学）の穴沢義功委員によると、古代の製鉄炉の数はこれまで岡山県内の遺跡（古墳時代）の五十九基が最高。製鉄技術が普及発展した奈良・平安時代では本沢遺跡が最多になる、という。しかも、同遺跡では、古いものを壊した上に新しい炉を築いており、相当の長期間、鉄を生産していた、とみられる。

岩木山ろくには製鉄遺跡が多い。本沢遺跡の南約四キロの鰐ヶ沢町・大平野遺跡と大角森山遺跡からは平安時代の製鉄炉跡がそれぞれ、三、四基出土。山ろく周辺の森田村や五所川原市では、鉄を加工する鍛冶場が多数見つかった。

しかも、山ろくは砂鉄の産地。鰐ヶ沢町の郷土史家、坂井冬樹さんによると、二十年ほど前まで、赤ん坊の頭大の金葉（かなくそ）製鉄したあとのクズ）が山中にゴロゴロころがっていた。鉄が不足した鉄時中は、本沢遺跡近くの鴨沢駅から貨車で搬出するほどだった、という。

鰐ヶ沢町内には、鉄にちなんだ地名が多い。同遺跡がある地区の地名「湯舟」は「熱した鉄を冷やす水の入った舟」。隣接地区の「小原敷」は「金敷」（鉄を打つ台）が転じた、とされる。刀鍛冶の若者を取り上げた伝説「鬼神太夫」。遺跡近くの神社のご神体は、巨大な鉄の塊……と鉄づくめの地だ。

平安時代、坂上田村原氏が蝦夷を征討し中央政府の勢力圏は次第に北上したが、東北北部は極端に蝦夷の反乱や、陸奥の豪族・安倍氏と中央から派遣された東國の武士団の衝突（前九年の役）など戦乱が相次いだ。岩木山ろく一帯の「製鉄コンビナート」が、武器や農具に使われた鉄の、北日本における供給源だった可能性が高い。

空沢遺跡 製鉄炉跡調査報告

青森県 鰐ヶ沢町 教育委員会送付資料

鰐ヶ沢 鬼伝説資料

青森県 鰐ヶ沢町 教育委員会送付資料

「謎解き日本古代史の歩き方」

彩流社

柴田弘武著 「鉄と俘囚の古代史」 彩流社

9.4. 中世 津軽安東氏の拠点 十三湊

—活発な国内各地・大阪との交易 & 鉄の積出—
jyusanprint.htm by M.Nakanishi 2000. 2. 22.

十三湊は十三湖と日本海にはさまれた砂州上に発達した港町。鎌倉時代には既に港町が存在し、室町時代には安東氏の居所としても大いに栄えた。

「津軽船」と呼ばれる船便で中央と結ばれる一方、当時の最北端の港として、北の世界とつながるターミナルとしての役割をはたし、中国との交易をはじめ、国内外の物産がこの地に集まった。

輸入陶器や安東氏の館跡や町屋などが発掘されている。

縄文時代の一大文化圏として脚光を浴びた津軽がその後大和朝廷の支



配下に入ったものの遠く未開の土地として、歴史の世界からは消えてしまう。

大和朝廷の影響の及ばない中で、独立の勢力として文化を育ててきたとおもわれる。そして、中世 安東氏の日本海交易による繁栄により、世界の物産が集まる大交易港湊町として脚光をあびた。

またこの時代 鉄の積み出し港としても栄え、津軽岩木山周辺の古代製鉄の流れが連続と引き継がれ、この時代においても 津軽が製鉄の大基地であり、安東氏の勢力もこの鉄の生産によるとも言われている。

私が昨年の秋、再度 十三湊を訪れたときには、台風の嵐の中。

荒れ狂う日本海に抗して砂州がひろがり、その内海・十三湖 十三湊では数多くの船が嵐のおさまるのを待っていた。天然の良港である。

日本海の荒波と風が吹きすさぶ北の端にあって、十三湊の繁栄の理由が判ったような気がした。

もっとも、十三湊はその後の大地震と日本海が吹き寄せ体積する砂によって 浅くなり また放棄され、現在ではひっそりとした津軽の一漁 港となっている。

本年 1 月 千葉県松戸市の博物館で催された『日本列島発掘'99』展で昨年 発掘調査された十三湊旧跡から出土した数々の物産を見た。中国の磁器はじめ、日本各地の品物が広くこの北の端の十三湊に集められ、また各地に散って行く。出土品の多用さと豪華さから、当時の十三湊の繁栄振りがよく判かる。



十三湊遺跡より
発掘された公益品の数々



「発掘された日本列島展」より 松戸博物館

6. 古代津軽 北の鉄の大王国【1】

岩木山北山麓の製鉄遺跡群と鬼伝説

【完】